

# 清代民国私家蔵『増廣註釋音辯唐柳先生集』考 —43卷13行本“宋刊”説と43卷12行本“元刊”説の検討—

戸崎哲彦

## はじめに

本稿執筆中に新刊の柳州市政府地方誌辦公室編『柳宗元著作版本圖考』<sup>1</sup>を入手した。諸版を網羅して全カラー図版をもって紹介した、これほど文図並茂を尽くした巨書は、韓柳に限らず、今日まで世に問われたことがないのではなからうか。現時点において『柳集』版本に関する集大成にして最も詳細で高いレベルにあると評してよい。ただ、なお不備な点が多いようである。本稿で扱う『増廣註釋音辯唐柳先生集』（以下、音辯本と呼ぶ）に限って見ても、43卷13行本の解説は数十頁に及んで周到であるが、それに比べ12行本に至っては全く考究されていないといってよい<sup>2</sup>。これはやはり近年、中国國務院によって批准・公布された文化部指定の「國家珍貴古籍名録」と関係があるのだろうか。今、第4次の公布に至っているが<sup>3</sup>、その国宝・重要文化財リストにも、なぜか43卷12行本は「元刻本」とするが1部しか見えない。明刊音辯本43卷13行本は20部以上指定されているのだが、明刊本の“珍貴”に及ばないと評価されたとは考えにくい。「名録」は刊刻年代によって「(一) 先秦兩漢時期」・「(二) 魏晉南北朝隋唐五代時期」・「(三) 宋遼夏金元時期」・「(四) 明清時期」の四期

1 吳瑪霞主編、劉漢忠編撰、廣西人民出版社2012年12月、A4判、全268頁。本書は劉漢忠「柳集版本叢考」（『廣西地方志』2009-42～2011-4）を基礎としていると思われる。

2 たとえば傅增湘・李盛鐸・張元濟の著録するものを「此三部當為同一版本」（p53）というが、前二者は45卷12行本、後者は43卷12行本であって同一版本ではあり得ない。また、43卷12行本の紹介は、元刻本の版式に三種あるとして「之一版式為十二行二十一字，小字雙行同，細黑口，四周雙邊，行格同於宋本，藏國家圖書館和吉林省館。之二版式為十二行二十一字，黑口，左右雙邊，藏國圖及和上海圖書館。之三為十三行二十三字，小字雙行同，細黑口，四周雙邊，存天一閣文物保管所」（p56）という前二者の記述がその全てである。しかもこの三種の紹介内容は『中國古籍善本總目（4）』（線裝書局2005年）の音辯本の「元刻本」（p1206）に一致する。詳しくは後述。本書は性格上多くの著録を引用するが、脚注はなく、また書末にも「参考／引用文獻」の類がないのが最大の不備である。

3 第1次（2008年）には2,392部、第2次（2009年）には4,478部、第3次（2010年）には2,989部、第4次（2013年）には1,516部が指定され、中国国家図書館・中国国家古籍保護中心編『第一批國家珍貴古籍名録圖録』（國家図書館出版社2008年）、『第二批』（2010年）、『第三批』（2012年）は全9,859部をカラー図版で紹介する。『第四批』は2014年2月の出版予定。

に分類して配したものであり、その鑑定に苦慮しているのであろうか。なお、古籍は4等級に分かたれ、3級まで善本、さらに各級で甲乙丙の3等に分かれる。元代以前が1級、宋本が甲<sup>4</sup>。

前稿では、ほとんど知られていなかった音辯本45巻12行本の現存とその特徴について考察を加え<sup>5</sup>、さらにそこから『天祿琳琅書目』等に43巻12行である版本が多く著録されていることに注目して、清内府蔵本の著録・鑑定とその現存について見ていった<sup>6</sup>。この他にも清代・民国における私家蔵書の中に43巻12行本を宋刊あるいは元刊として著録する者が少なからずあり、また、一方で43巻の13行本を宋刊として著録する者も多い。それらの年代鑑定の根拠は何なのか、行数以外、いかなる点に他版と異なる特徴を認めたのか、そして43巻12行本は今日に伝存するのか。本稿ではこれらを明らかにし、その結果に俟って現存本による特徴の確認と他の版本との関係の究明を試みたい。

## I 私家蔵“宋版43巻本”の著録とその鑑定

以下、入手し得た清代から今日に至る著録資料の中で音辯本43巻本を宋版とする説を拾って整理し<sup>7</sup>、それらのいう鑑定の根拠や特徴、問題点について検討を加え、さらに該書の存否を追跡していく。

### 1：銭大昕（1728-1804）蔵：乾道、淳熙刊43巻12行本（?）

銭大昕『潛研堂序跋』（嘉慶十一年1806）巻9「跋柳河東集」<sup>8</sup>にいう。

注『柳集』者、南城童宗説、新安張敦頤、雲間潘緯、不知何人合而刻之。  
潘氏『音義』成於乾道三年，此本於“敦”字尚未缺筆...當刊行於乾道、淳熙之朝矣。

4 2006年公布「古籍定級標準」、湯野基生「中華古典籍保護計画について」（『アジア情報室通報』10-3、2012年、p6）に詳しい。

5 「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五巻12行本考」（『島大言語文化』33、2012年）、「日本舊校鈔『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五巻本及南宋刻『音註唐柳先生集』略攷」（『文史』2014-01、中華書局）。

6 「清内府蔵本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」（『島大言語文化』35、2013年）。

7 羅偉国・胡平編『古籍版本題記索引』（上海書店1991年、華東師範大学出版社2011年）は100余種の書籍に拠って歴代の著書を取める点において網羅的な労作であり、『柳集』に関する部分（p476-478）のみでも今日までの柳宗元版本研究にない資料として便利ではあるが、使用書は極めて不十分であり、かつ考証を伴った整理がなされておらず、分類・同定には誤りが多い。

8 『中國歴代書目題跋叢書』3輯（上海古籍出版社2010年）所収p159。『潛研堂文集』（嘉慶十一年）に拠る。

缺筆という客観的な根拠を明示して成立年代を考えた早い例である。巻数や版式・行款について言及がないが、前稿で述べたように現存する45巻本＝李木斎旧蔵本および蓬左文庫蔵の金沢文庫旧蔵聡達(1280-?)鈔本では宋諱缺筆が「廓」字(光宗「擴」と同音)まで及ぶからこれと異なる。「敦」字(光宗「惇」と同音)に及ばないのであればこれよりも早い刊刻ということになる。

皇帝	諱	在位	年号
高宗	構	1127-1162	建炎 紹興
孝宗	昚	1162-1189	隆興 乾道 淳熙
光宗	惇	1189-1194	紹熙
寧宗	擴	1194-1224	慶元 嘉泰 開禧 嘉定
理宗	昀	1224-1264	寶慶 紹定 端平 嘉熙 淳祐 寶祐 開慶 景定

ただし缺筆が厳格に行われないのは坊刻本の常習であって43巻12字本の中には正集中で「敦」字を缺筆していても集の最初(巻首の「諸賢姓名」中)に出てくる「敦」字を缺筆しないものがあり、それが先入主となって以下の正集については見落としてしまった可能性もある。

## 2：孫星衍(1753-1818)蔵：季振宜(1630-1674)旧蔵宋刊43巻13行本

孫星衍『孫氏祠堂書目内編』(嘉慶五年1800)<sup>9</sup>巻4に次のようにいう。

『増廣注釋音辨柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷。

唐・柳宗元撰，宋・童宗說注釋，張敦頤音辨，潘緯音義。一宋刊本，一宋重刊本。一宋刊廿卷本。

音辨本43巻本に「宋刊本」と「宋重刊本」の二種類があったとする。孫星衍『平津館鑒藏記書籍』(嘉慶十三年1808)<sup>10</sup>巻1「宋版」にはやや詳しく記されている。

『増廣注釋音辨唐柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷。

題「南城先生童宗說注釋，新安先生張敦頤音辨，雲間先生潘緯音義」。前有夔州刺史劉禹錫「序」、「柳先生年譜」。據後本，當有陸之淵序文，疑此本脫去。『別集』、『外集』、『附録』總目，既列在『正集』目錄之後，又列刻在當卷之首，殊為重複。黑口版。每葉廿六行，行廿三。收藏有「季振宜藏書」朱文、小長方印。……【A】

9 『海王邨古籍書目題跋叢書』第3冊(中国書店影印2008年)所收8a、p56上。『中國歷代書目題跋叢書』3輯(上海古籍出版社2008年)所收、p603。

10 『海王邨古籍書目題跋叢書』第3冊(影印2008年)所收8b、p96上。『中國歷代書目題跋叢書』3輯所收、p28。

『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷。

題童宗說、張敦頤、潘緯，俱同前本。前有劉禹錫「序」，又有乾道三年陸之淵「柳文音義序」，即為潘緯作也。末附『別集』上下兩卷，已殘缺不全。黑口版。每葉廿六行，行廿三。此本與前本行款毫髮無異，惟前本「目錄」後有『別集』、『外集』、『附録』目錄，此本雖有『別集』而無「目錄」，亦無別刻之葉。細審之，版式與前本差減一分，間有字畫減不減之異。又紙色頗不及前，故知其模刻，當在後也。……【B】

『平津館鑒藏記書籍』の著録は全体的に『天祿琳琅書目』の影響を受けている<sup>11</sup>とされるが、『天祿琳琅書目後編』では言及のなかった版式の特徴について補足しており、それによれば、この「宋版」A・Bは共に43卷・半葉13行・行23字であるから、45卷本とは巻数だけでなく、行款も異なる。しかも二本は異なっており、その最大の相異はA本が巻首の「目錄」に『別集』・『外集』・『附録』を含むにも関わらず、また巻43の後にも『別集』以下の「目錄」があって重複している点にある。B本には『別集』はあるが「目錄」がなく、版匡もA本より数ミリ小さい。A本が『内編』にいう「宋刊本」、B本が「宋重刊本」である。しかしこれらを宋刊とする根拠は不明。また孫星衍撰・陳宗彝編『廉石居藏書記内編』（道光十六年1836）<sup>12</sup>巻上には次のようにいう。

『柳宗元文集』四十三卷

右『柳集』四十三卷，稱『増廣註釋音辯唐柳先生集』。前有乾道三年陸之淵序。署“童宗說註釋，張敦頤音辨，潘緯音義”。考陳振孫『書録解題』，有『韓柳音辨』二卷，云：“南劍州教授新安張敦頤撰，紹興八年進士。”知『音辨』本單行，書賈合刻之。此本甚精緻，蓋宋版也。惟以宋、元『本集』、『外集』合併為一，分類排次，非劉禹錫所編舊次為歎耳。

陸「序」があるから先のB「宋重刊本」を指すであろう。全体的に『四庫全書總目』の記載に更に近くなっているが、ここに宋版と鑑定した根拠らしきものが窺える。しかしそれはただ精緻であるという判断であり、主観的なものに属して確証性が乏しい。

この二本は恐らく現存する。A本には清初・季振宜（1630-1674）の蔵書印があったというが、北京図書館所蔵# 01025は『増廣註釋音辯唐柳先生集』

11 『中國歷代書目題跋叢書』第3輯所收本「標點說明」p7。

12 『中國歷代書目題跋叢書』3輯（上海古籍出版社2008年）所収p215。

四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷。明初刻本、十六冊<sup>13</sup>にして「〔季振宜／藏書〕朱文、小長方印」（「年譜」1a等）<sup>14</sup>を有し、巻首の「目録」の他に『別集』の前にも『別集』・『外集』・『附録』の「目録」があり、巻首には劉禹錫「序」があるが陸之淵「序」を欠く。また、当館『書目』には記載されていないが、「目録」の前に「年譜」もある。いずれの点においても『平津』A本の特徴に符合する。ただし季振宜『季滄葦書目』<sup>15</sup>の「宋元雜板書」には「〔柳集〕四十三卷：元板」とあり、これは43巻本であるから音辯本に相違ないが、元版と鑑定されている。また前稿で指摘したように#01025の題籤には「元栞唐柳先生文集」とあり、その下に「咫進齋藏」と署す。咫進齋こと姚覲元（1823-1902）も元刊本と鑑定していた。後に当館『書目』は「明初刻本」に訂正する。

『平津』B本の方は袁芳瑛（1814-1859）、李盛鐸（1859-1934）の収蔵を経て北京大学図書館（#李2624）に帰しており、その孫星衍跋に次のようにいう。

『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十三卷。宋本。署“童〔宗〕説註釋”者……知音辨本原乃書賈合刻之，尊為“先生”耳。『四庫』書所收有此本，稱“麻沙〔小字〕版，〔尚〕不失其真”，良可寶也。孫星衍記。

「宋版」と鑑定した根拠として挙げる『四庫全書總目』には「舊本題“宋・童宗説註釋……潘緯音義”。坊賈合（潘）緯之『音義』刊為一編，……。舊有明代刊本，頗多訛字。此本為麻沙小字版，尚不失其真」とあり、この「舊本題宋……」に拠ったのであろうか。当館『書目』<sup>16</sup>ではこれも「明初刻本」と見做している。

### 3：馮登府（1783-1841）藏：朱彝尊（1629-1709）旧藏宋刊43卷13行本

北京図書館蔵#0528「四十三卷、附録一卷：明初刻本。馮登府跋。十二冊」の巻首の扉裏に次の跋がある。

『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷。題“南城先生童宗説註釋，新安先生張敦頤音辨，雲間先生潘緯音義”。前有劉禹錫「敘」、〔年譜〕、乾道三年陸之淵「柳文音義序」、為潘緯作也。宋刊黑口本，每葉廿六行，…行廿三字。

右趙山堂雜記也。驗之，此本悉合，惟紙墨饒黝，蓋宋版之下一等耳。中

13 前掲『北京圖書館古籍善本書目』p2063。

14 林申清『中國藏書家印鑑』（上海書店出版社1997年）「季振宜」p76。

15 台湾・広文書局『書目五編』（影印1972年）所収（38b、p76）。

16 『北京大學圖書館藏古籍善本書目』（北京大学出版社1999年）p417右。

有竹垞印。余得之禾中（浙江嘉興）書估。時甲午（道光十四年 1834）人日。  
登府（印）

馮登府『石經閣藏書目錄』<sup>17</sup>には見えない。前稿で述べたように、後に姚覲元に帰して入蔵したもので、『咫進齋善本書目』巻4にも跋文は「時甲午人日」まで録されており<sup>18</sup>、繆荃孫『清学部圖書館善本書目』（民国二年 1913）もこれを転載する。姚覲元の跋のように思われるが、じつはその後に「登府」の印があり、また本書は他に「小長廬舊史馮氏手校」等の印を有す。「別集二卷、外集二卷」を欠くが、『咫進齋善本書目』でも「四十二 [三] 卷：元刊本」としているから早くに『別集』等を失っていた。やはり 13 行本であるが、本書の『附録』は李褫「序」<sup>19</sup>で終わり、末（12b）に空一行がある。他の 13 行本では末行から文安礼「柳文年譜後序」が始まり、13a で終わる。ちなみに「柳文年譜」を欠く一本があるが、『附録』には文安礼「柳文年譜後序」を収める。四部叢刊所収本がそうである。本書は「年譜」のみならず、『附録』では「年譜後序」を欠いて李褫「序」で終わり、一葉少ない、特殊な一本である。

「趙山堂」は未詳。本書は「竹垞」こと朱彝尊（1629-1709）の『竹垞行笈書目』<sup>20</sup>には見えず、また『曝書亭序跋』<sup>21</sup>が挙げる『柳集』は世綵堂本のみであり、『曝書亭藏書目』には「柳河東集二十本」<sup>22</sup>のみを載せる。

#### 4：莫友芝（1811-1871）蔵：南宋刊初印 43 卷 13 行本

莫友芝『影山草堂書目』<sup>23</sup>に次のようにいう。

『韓集』二匣十二冊。南宋刊初印，半頁十三行，行廿三字。

宋・朱熹考異，王伯大音釋。正集四十卷，外集十卷，附遺文。

『柳集』二匣十二冊。南宋刊初印，半頁十三行，行廿三字。

唐柳宗元。正集四十三卷，別集二卷，外集二卷，附録一卷。宋・張

17 『中國著名藏書家書目彙刊－明清卷（28）』（商務印書館 2005 年）所収。「韓文公文選，二本；柳柳州文選，六本」（p576）が見えるのみ。

18 『中國著名藏書家書目彙刊－近代卷（28）』所収（p121）。「四十二」・「外傳」に作るのは「四十三」・「外集」の誤字。

19 『柳宗元集（4）』（中華書局 1979 年）「附録」（p1446）のように名を「褫」（衣偏）に作るものがあるが、「褫」（示偏）が正しいであろう。

20 『中國歷代書目題跋叢書』3 輯所収（2010 年）。

21 『中國歷代書目題跋叢書』3 輯所収（2010 年）、巻 23、p324。『曝書亭集』・『曝書亭集外文』等の「序跋」に拠った編。

22 『清代私家藏書目錄題跋叢刊』（国家図書館出版社 2010 年）第 1 冊所収（清抄本）p216。

23 『清代私家藏書目錄題跋叢刊』第 4 冊所収（清稿本）p213。

敦頤音辨, 童宗說注釋, 潘緯音義。

著録には二書が合刻本であったかのような理解が感じられる。また莫友芝『邵亭知見傳本書目』<sup>24</sup> 卷 12 下に

『增廣註釋音辨柳集』四十三卷：○宋刻本，題『增廣註釋音辨唐柳先生集』，四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷。黑口，頁廿六行，行廿三字，蓋與『韓文考(異)』黑口同刻。○『天祿後目』有宋刻小字本四部、元刻本二部。○張氏『志』有元・延祐間刻本，述古堂舊藏。○姚若有元刻本，題『京本著〔校正音釋?〕唐柳先生集』，張氏元本題與宋刻同。○『天祿書目』：『增廣註釋音辨唐柳先生集』元刻本三部。其一云：“是書亦翻刻宋本，字畫猶存其概，而紙質墨香只不相侔矣<sup>25</sup>。”其二云：“是刻板式雖仿前書，而刻印之工又出其下。”其三云：“此本較第二部又遜，三書非一板，何開雕者多而艸仲從事耶。”

半葉 13 行 23 字本であり、これを「宋刻本」とする根拠は「與『韓文考(異)』黑口同刻」、『韓文考異』の版式との同一に求められているが、莫氏が『柳集』の前に『韓文考異』として掲げる『朱文公校昌黎先生文集』については「宋刻別本『韓文考異』。黑口，每頁廿六行，行廿三字，題“晦菴朱先生考異、留耕王(伯大)先生音釋”。『目錄』一卷，題李漢編集。前有朱文公「序」、寶慶三年王伯大「序」。校凡例末有識語，謂“今本宅所刊係將南劍州官本為據，並將音釋附正”<sup>26</sup>というのみであり、確証を欠く。『朱文公校昌黎先生文集』には 13 行本の他に音辯本と同じ版式の 12 行本がある。後に莫友芝のこの説は葉德輝 (1864-1927) に影響をあたえる。詳しくは後述。なお、莫友芝『宋元舊本書經眼録』<sup>27</sup>には音辯本のみならず、『柳集』の著録は見えない。

### 5：方功惠 (1829-1897) 蔵：宋刊 43 卷 13 行本

李希聖 (1863-1905) が方功惠碧琳琅館収蔵本のために撰した『雁影齋題跋』(光緒二四年 1898)<sup>28</sup> 卷 1 に次のようにいう。

『增廣註釋音辨唐柳先生集』四十三卷：宋本。

每版十三行，行二十三字。墨色明朗，殆印本之最先者。無收藏家印記，然紙色、

24 『清代私家藏書目錄題跋叢刊』第 4 冊所収 (宣統元年 1909 刻本) p255、また『藏園訂補邵亭知見傳本書目』(中華書局 2009 年) 第 3 冊 p1026。

25 『藏園訂補邵亭知見傳本書目』(中華書局 2009 年) 第 3 冊 (p1026) は「只」を「大」に作る。

26 『藏園訂補邵亭知見傳本書目』第 3 冊、p1019。

27 『中國歷代書目題跋叢書』3 輯所収 (2009 年)。

28 『中國歷代書目題跋叢書』3 輯 (2009 年) 所収、p323。『李希聖集』(華東師範大学出版社 2011 年)「雁影齋題跋序」(p121) はこの点校本からの採録。

墨色確為宋本無疑。書賈好偽造收藏家印記，而篆法甚劣，致使古書舊槧為其點污，最為可惡。此本獨無之，亦幸事也。『四庫』著錄即此本。雖麻沙坊刊，然勝於明刊本萬萬矣。

本書は方功惠藏并編『碧琳瑯館書目』（同治五年1866）卷4の「明本」下にいう「『増廣註釋音辯柳先生集』四十五卷：八本，一函」<sup>29</sup>とは別本である。この「明本」の「四十五卷」本とは正集43巻と別集2巻を合わせた謂い。「宋本」「四十三巻」とは、正集しか存在しなかったかのようであるが、『『四庫』著錄即此本』というから、『四庫全書總目』の「提要」に従ったまでのこと。明刊本との比較も「提要」の「舊有明代刊本，頗多譌字。此本為麻沙小字板，尚不失其真云」に拠るものであって、この限りでは元刊本であることを否定しない。宋本とする根拠はただ「紙色、墨色」に過ぎず、先に孫星衍が「甚精致」に拠ったのと大差なく、確証を欠く。孫星衍の説も四庫館臣の説に影響されたものであった。『四庫全書總目』にいう「内府藏本」音辯本は宋本と考えられていたのではなかろうか。

#### 6：陸心源（1834-1894）藏：錢曾（1629-1701）旧藏宋刊43巻13行本

陸心源『皕宋樓藏書志』（光緒八年1882）<sup>30</sup>巻69に次のようにいう。

『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十三巻、年譜一卷、別集二巻、外集二巻、附録一卷。宋刊本。述古堂舊藏。

唐・柳宗元撰，宋・童宗說註釋，張敦頤音辨，潘緯音義。

劉禹錫「序」。

“余讀韓柳文，……乾道三年十二月吳郡陸之淵書。”（「柳文音義序」）

案：此宋刊宋印本。每葉二十六行，每行二十三字。小字雙行。卷中有「花笑廬藏」朱文長印、「劉棻所藏」朱文長印、「暝琴山館珍藏」朱文方印。劉棻，號疏雨，烏程人，見『南潯志』。

ほぼ同じ文が陸心源『儀顧堂書目題跋』（光緒十六年1890）巻12「宋・麻沙槧『柳集』跋」<sup>31</sup>にも見える。

『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十三巻、年譜一卷、別集二巻、外集二巻、附録一卷。（巻1首行「増廣註釋音辯唐柳先生集」）次行題“南城先生童宗說註釋”，三行“新安先生張敦頤音辨”，四行“雲間先生潘緯音義”。前有劉禹錫「序」、乾道三年吳郡陸之淵「序」。行款格式，與『韓文考異』同，當為一家所刻，亦宋

29 『中国著名藏書家書目匯刊・近代卷』第28冊所収、p440。

30 台湾・広文書局『書目續編』（影印1968年）所収（10 b、p3076）。

31 馮惠民整理『儀顧堂書目題跋彙編』（中華書局2009年）p416。



季麻沙坊本也。有「花笑廡藏」朱文長印、「劉松所藏」朱文長印、「暝琴山館珍藏」朱文方印、「述古堂圖書記」朱文長印。劉松號疏雨，烏程縣南潯鎮人。其藏書之所曰“暝琴山館”。

「行款格式」が同じであるとする『韓文考異』については、「宋・麻沙槧『韓文考異』（朱文公校昌黎先生文集）跋」に「每葉二十六行，每行二十三字，小字雙行。凡各本異同，各家注釋，皆以黑質白章別之」という。共に13行本である。

「花笑廡藏」、范鏜（1765-1844）、烏程人。劉松・劉桐（?-1803）の兄弟、范鏜・張鑿等は為に『南潯劉氏暝琴山館藏書目』（嘉慶二五年1820）を撰す<sup>32</sup>。印「述古堂圖書記」があり、もとは「述古堂」こと錢曾（1629-1701）の旧蔵であった。錢曾『述古堂藏書目』<sup>33</sup>（康熙八年1669）卷2に「『柳柳州集』五十卷十六本」、また錢曾『也是園藏書目』<sup>34</sup>に「『柳先生文集』四十三卷、『別集』二卷、『外集』二卷」（計47卷）とあって巻数が異なるが、後者は『別集』を分けた43巻本であるから音辯本に違いない。錢曾『讀書敏求記』<sup>35</sup>には音辯本は固より『柳集』も見えない。ただしこれには佚文があり、曾祖父の錢謙益（1582-1664）『絳雲樓書目』<sup>36</sup>には「『宋板柳子厚集』：四十五卷，劉禹錫序」と見えるが、巻数が異なるから別本である。あるいは『述古堂書目』にいう「五十卷」本がこれであって「五十」は「四十五」の誤りであろうか。後に錢曾の収蔵は季振宜の所蔵に歸しており、『季滄葦書目』に「『柳集』四十三卷：元板」と見えた。

これを宋版とするのは、「行款格式」の「宋・麻沙槧『韓文考異』」との同一と巻首の「乾道三年十二月吳郡陸之淵書」「序」の存在ではなからうか。しかし『韓文考異』（『朱文公校昌黎先生文集』）についても「凡例後有云“本宅所刊係將南劍州官本為據，併將音釋附正集焉”，宋末麻沙坊賈識語。明覆本訛奪甚多，此本字畫周整，訛字亦少，宋季麻沙善本也」というのみであり、宝慶三年（1227）王伯大「序」をもつ南劍州官本以後の「麻沙坊賈」による成立であるとはいえ、宋（～1279）末であることの確証は示されていない。「凡例後」の「坊

32 李玉安等『中國藏書家辭典』（湖北教育出版社1989年）「劉桐」p207、聶付生『晚明文人的文化傳播研究』（中國戲劇出版社2007年）p114。

33 『中國著名藏書家書目彙刊－明清卷』（商務印書館2005年）第17冊所取粵雅堂刻本、4b、p74、叢書集成初編（中華書局1985年）0036所收、p15。

34 『海王邨古籍書目題跋叢書』第1冊所取3a、p164下。瞿鳳起編「虞山錢遵王藏書錄彙編」（『中國歷代書目題跋叢書』2輯所收、2007年）卷6（p190）。

35 『書目題跋叢書』（中華書局2012年）所收『藏園批注讀書敏求記校證』。

36 『稿抄本明清藏書目三種』（北京圖書館出版社2003年）所取（148a、p563）。

賈識語」の他に、李漢「序」の後に「歲舍戊辰十月吉旦，書林王宗玉謹識」という歳次を示した刊記を有する版本があるが<sup>37</sup>、ここにいう「宋末麻沙坊賈識語」はこれを指すものではなからう。この『韓集』にはその刊記はなかった。これについては後文で詳考。

周知のごとく陸心源の蔵書は光緒三三年（明治四〇年1907）に岩崎弥之助（1851-1908）によって購入され、靜嘉堂文庫に納められた。その後、

『増廣註釋音辯唐柳先生集』四三卷、別集外集各二卷、年譜一卷、附一卷：  
唐・柳宗元宗元撰、宋・童宗說注、張敦頤音辯、潘緯音義。元刊。一二（冊）、  
五（函）、一九（架）、卮。

というように<sup>38</sup>、「卮」= 卮宋樓（宋版二百種を蔵する樓）陸氏蔵本は「元刊」に改められ、さらに「後の調査により明刊本と認定」<sup>39</sup>されるに至っている。卮宋樓蔵『韓文考異』も元刊とされていたが、同じく明刊に訂正される。「後の調査」の内容は不明であるが、すでに傅增湘（1872-1949）は「元明間刊本，陸心源氏原題宋刊。……按：此乃元明間刊韓柳合集本，世多有之，余亦藏一帙，不知陸氏何緣而不辨也。日本靜嘉堂文庫蔵書，己巳十一月十三日閱」<sup>40</sup>と訝っていた。

#### 明末・毛友仁旧蔵「元・延祐間刻」本

錢氏述古堂旧蔵本については張金吾（1787-1829）『愛日精廬藏書志』<sup>41</sup>（嘉慶二十五年1820）卷29にも記録がある。

『増廣註釋音辯柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷、附錄一卷。元刊本。  
述古堂蔵書。

唐・柳宗元撰，宋・南城先生童宗說注釋，……雲間先生潘緯音義。卷首有毛友仁及錢遵王印記。

陸之淵「音義序」乾道三年。

劉禹錫「序」。

毛氏手跋曰：“萬曆丙子（四年1576），余泊舟荊溪，偶至王鵝湖書肆閱此，

37 通行本では四部叢刊本。

38 『靜嘉堂文庫漢籍分類目録』（昭和五年1930年）p631、『靜嘉堂宋本書影』（文求堂・松雲堂、昭和八年1933）にはなし。『靜嘉堂祕籍志』（大正六年1917）（賈貴榮輯『日本藏漢籍善本書志書目集成』北京図書館出版社2003年）卷32「別集類」（p158）には「又案藏書志別有宋刊増廣註釋音辯四十三卷本。既收于卮宋樓本」というのみ。

39 『靜嘉堂文庫宋元版圖録・解題篇』（汲古書院1992年）「凡例」p18、p19。

40 『藏園羣書經眼録（四）』（中華書局2009年）卷12、p884。

41 台湾・文史哲出版社1982年影印、18 b、p873。

因授值〔而〕攜歸，以舊所藏者參之，乃元延祐間（1314-1320）刻也。喜成二帙，援筆志之。會川子友仁。”

といい、明末・毛友仁（?-?）の鑑定に従って元刊本とする。張金吾（字は月霄）跋と毛友仁（字は輔元）跋を有する本書は現存する。台湾・中央図書館が所蔵する# 09749「明正統十三年覆元建刊本」がこれであり<sup>42</sup>、今、毛跋の原文によって張氏の転載を一字補った。「毛友仁印」「友仁之印」「會川」「輔元」・「錢曾之印」「遵王」・「張金吾藏」「月霄」の他に「丕烈」（黃丕烈 1763-1825）・「英川鑑定」（張蓉鏡 1803-?）・「藝風審定」（繆荃孫 1844-1919）・「苾圃收藏」（張鈞衡の子、張乃熊 1891-1942）等々多く蔵書印・觀藏印を有する<sup>43</sup>。本書は後に張鈞衡（1872-1927）に帰し、その『適園藏書志』<sup>44</sup> 卷 10 や張乃熊『苾圃善本書目』<sup>45</sup> 卷 2 でもやはり「元刊本」として著録されていたが、今日、当館では明刊本と鑑定している。なお、張乃熊は『邵亭知見傳本書目』（民國三年 1914）を排印した人物<sup>46</sup>。

この毛氏旧蔵本 # 09749 には宋諱の缺筆はなく、また卷首「諸賢姓氏」1b の末 2 行に跨っては明らかに 1 行の中ほどを剝した痕跡が認められる。紙面の色はその部分のみ周辺よりも白っぽく浮き上がり、罫線が 9 字分抜け落ちている。じつは別本ではこの位置に刊刻木記「正統戊辰善敬堂刊」1 行 8 字・枠付（全体で 9 字分に相当）があり、その剝痕は正にこの部分に一致する。書坊が故意に版面を殺ぎ落として旧を装ったものであること、疑いない。中央図書館 # 09748 にも同様の痕跡が認められる。これらは明・正統十三年善敬堂刊本による後印本に相違ない<sup>47</sup>。「正統戊辰善敬堂刊」本については後文で詳考する。したがって毛氏が「延祐間刻」とするのは明らかな誤りであり、正統十三年（1448）から毛氏が入手した万曆四年（1576）までの間に元・建陽刊本を装って

42 『國家圖書館善本書志初稿・集部』（國家圖書館特藏組編 1999 年）p131。張金吾の引文は「而」字を脱す。今、原本真筆によってこれを補った。

43 『國家圖書館善本書志初稿・集部』p130。また阿部隆一『〔増訂〕中國訪書志（3）』（汲古書院 1983 年）でも「明正統十三年刊，覆元建刊本」（p552）とする。

44 『海王邨古書籍目題跋叢書』第 5 冊、9b、p373 上。

45 『書目三編』（台湾・広文書局 1969 年）所収、p24。

46 『藏園訂補邵亭知見傳本書目』卷首「附録」p21。

47 すでに阿部隆一『慶應大學大學附屬研究所斯道文庫貴重書蒐選・圖録解題』（汲古書院 1997 年、p132 上）に「〔正統戊辰善敬堂刊〕の刊記は元刊と見せかけるために剝されたものか存する例が少なく、台湾には同版とみられる本が六部以上あるがすべて刊記がない」、『中國訪書志（3）』（p552 上）に「諸賢姓氏の末の刊記の所を破いた跡があり、匡郭の一部が僅かに残っている」として「明正統十三年・覆元建刊本」とし、また新海一『〔増廣註釋音辯唐柳先生集〕校讎』（『柳文研究序説』汲古書院 1987 年、p213）でも指摘されている。

覆刻された一本であった。毛氏の根拠「以舊所藏者參之」が具体的に何を指すのか不明であり、あるいは傅增湘が「元明間刊韓柳合集本、世多有之」というように『柳集』と合刊された『韓集』かとも想像されるが、延祐刻の朱校本の存在は今日知られていないのみならず、そもそも「舊所藏者」という言そのものが曖昧であって何とも怪しい。後に錢曾・張金吾・黃丕烈・張蓉鏡・陸心源・繆荃孫・張鈞衡・張乃熊や後述する楊紹和・丁祖蔭等々、さらに上海図書館や阿部隆一氏<sup>48</sup>、新刊の『柳宗元著作版本圖考』<sup>49</sup>に至るまで、この明人の言に振り回されて来た。

上海図書館蔵の43巻13行23字本もかつて『書目』<sup>50</sup>では「元・延祐刻本」とされていた。本書は「朱彝尊印」・「竹垞藏本」の印記を有する朱彝尊(1629-1709)旧蔵本であり<sup>51</sup>、残念ながら巻首を欠くが、巻1の前に補綴された一葉には次のような章懐(1804-1875)自筆の跋文がある<sup>52</sup>。

此刻於元・延祐〔祐〕者。前有宋乾道三年陸子〔之〕淵〔音義序〕，計正集四十三卷、別集二卷、外集二卷、附錄一卷。較別刻『柳州集』，惟此最為善本。張月霄〔金吾〕所藏亦即是刻。余前藏有明刻本，脫譌殊甚。查初白〔1650-1727、名慎行〕先生校此本，為之通體校正，並參以攷據。余重先生手跋，不敢輕棄，然視此本仍不能無上下床之別。惜此本缺去「序文」、「目錄」及後數卷，不能無憾，行當訪求，補抄以成全帙。茗南章懐謹識。

これも張金吾『愛日精廬藏書志』が記載する毛友仁の説に出るものであった。今日では「明初刻本」に修正されている<sup>53</sup>。明刻音辯本にも複数版あり、「諸賢姓氏」末葉の1行の中央で罫線が9字分消えているもの、つまり「正統戊辰善敬堂刊」8字とその枠が削られているもの、また木記の枠はあるが内部が墨丁

48 『中國訪書志(2)』(p277下)に「上海図書館善本目録(「目録」は「書目」の誤)には十三行廿三字の元延祐刊本が録され、それが元刊十三行本の祖かもしれぬ。ただしこれは『中國訪書志(3)』(p552上)の「明正統三年・覆元建刊本」説と自己撞着する。

49 元刻本の種類として「延祐刻本」(p8)、「延祐間刻本」(p56)が挙げられているが、その出自である毛跋等は全く引かれておらず、またこれ以上の言及もない。

50 『上海圖書館善本書目』(1957年)巻4「集部」(4a)「増廣註釋音辯唐柳先生集四十三卷別集二卷外集二卷附錄一卷」に「元延祐刊本：半葉十三行 行二十三字；存十卷：一至二、七至八、十四、二十六至三十」。

51 朱彝尊『竹垞行笈書目』・『曝書亭序跋』(前掲)に見えない。

52 字は綬銜、号は紫伯。「綬」「銜」、「章綬銜印」、「紫伯秘翫」、「紫伯」、「翼詵堂章氏所得之書」等の印記あり。

53 『中國古籍善本書目・集部』(上海古籍出版社1996年) #1503 (p129)、『中國古籍善本總目(4)』(線裝書局2005年) #980 (p1206下)。

になっている、つまり削って埋木しているもの、また「正統戊辰善敬堂刊」の木記を有するが9行18字の改版本、さらに13行23字本であるが「諸賢姓氏」に木記はなく集末に正徳十年（1515）劉玉「重刊柳先生文集跋」1葉を有する別刻がある。後者の9行本は「諸賢姓氏」を「諸賢姓氏」に作るなど、書全体に亘って異体字や誤字脱字が多く、稚拙な刀刻にして、「正統戊辰善敬堂刊」を装った一本である。これら明刻本と比較すればより古いことは明らかであり、そこで元代が推定され、張金吾の引く毛友仁説によって延祐に求められた。なお、「延祐」を「延佑」に、「陸之淵」を「陸子淵」に誤るなど、『柳集』に通じているとは言いがたい。

### 7：繆荃孫（1844-1919）蔵：宋刊43巻13行本

繆荃孫『藝風藏書續記』<sup>54</sup>（民国二年1913）巻6に次のようにいう。

『柳先生文集』殘本四卷

宋刊本。每半葉十三行，行二十三字。高六寸，廣四寸。黒口，雙邊。  
只二十至二十三，共四卷。

『柳集』伝世諸本の中で13行23字の行款をもつものは音辯本43巻本しか知られていない。また、「寸」単位によるサイズ表記は厳密とはいえないが、音辯本にはほぼ一致し、「黒口，雙邊」の版式も合致する。ただ音辯本は毎巻の首行に「増廣註釋音辯唐柳先生集」とあるが、「柳先生文集」とするのはその略称であろう。これとは別に繆荃孫『藝風藏書記』（光緒二十七年1901）巻6には「増廣註釋音辯唐柳先生文集」四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷「元刊本。亦每半葉十三行，每行二十三字」<sup>55</sup>といい、「文集」に作る。共に「文」は衍字。しかし同じく13行23字本でありながら、一方を「元刊本」とし、一方を「宋刊本」と区別する根拠は明白でない。前稿で触れたように繆荃孫『清学部圖書館善本書目』（1913年）でも43巻13行本を「元刊本」としていた。「元刊本」とする鑑定は、かりに毛氏旧蔵本との一致が認められたことに因るとしても、藝風蔵「元刊本」も「缺二十三至二十五」、わずか四巻の殘本であり、しかも「宋刊本」殘本「二十至二十三」と比較できたのは巻20から巻22までであった。また、かりに「宋刊本」の殘本だとしても巻首の「目録」や巻43後の「非国語」を欠くから、45巻本・43巻本であるかも判定困難であろう。

54 『中國歷代書目題跋叢書』2輯所收（2007年）p400。

55 『中國歷代書目題跋叢書』2輯所收 p133。

**8：葉德輝（1864-1927）藏：南宋麻沙書坊刊 43 卷 13（？）行本**

葉德輝『卮園讀書志』<sup>56</sup> 卷 7 に次のようにいう。

『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷。南宋・麻沙書坊刻本。

莫友芝『知見傳本書目』云：“宋刻本。題『増廣註釋音辯唐柳先生集』。……蓋與『韓文考異』黑口同刻。”即此本也。『四庫全書・集部』著録“內府藏本”，無『別集』、『外集』、『附録』。『提要』云：“題‘宋・童宗說注釋，張敦頤音辨，潘緯音義’。……舊有明代刻本，頗多譌字。此本為麻沙小字版，尚不失其真云。”則『四庫』著録亦此本也。此與前『朱文公校昌黎先生集』同出長沙故家，書冊大小裝訂精雅，如出一手，蓋二集久為人所合藏，未嘗離析者，斯誠可稱雙璧矣。

葉氏が『知見傳本書目』稿本を見たのは民国十一年（1922）<sup>57</sup>。前述のごとく莫友芝が「宋刻本」とする説はすでに根拠を欠く。12 行本か 13 行本かの言及はないが、莫友芝の著録するものと同じく 13 行本であったに違いない。

前稿で指摘したように<sup>58</sup>、『四庫全書總目』提要では「『増廣註釋音辯柳集』四十三卷：內府藏本」と題するが、文淵閣本・文津閣本ともに『本集』43 卷の他に『別集』2 卷・『外集』2 卷・『附録』1 卷を収めていた。

**9：李盛鐸（1859-1934）藏：孫星衍（1753-1818）旧藏宋刊 43 卷 13 行本**

木犀軒こと李木斎、名は盛鐸、は音辯本を二部収蔵していた。一つは前稿で詳考した淳祐九年（1249）劉欽「後序」を有する 45 卷本（北大図書館蔵#李 9083）であり<sup>59</sup>、また『木犀軒収蔵舊本書目』（手稿本）<sup>60</sup>では「『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷、外集二卷、附録一卷：宋刊本，十二冊二函）45 卷本の後に続いて次のようにいう。

『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十三卷、別集二卷；袁漱文〔六〕舊藏，宋刊本，孫淵如手跋。八冊一布套。

56 『中國歷代書目題跋叢書』3 輯所收（2010 年）p346。

57 莫繩孫（莫友芝の子）の稿本の前には葉德輝の「壬戌」の手跋があるという。『藏園訂補卮亭知見傳本書目』巻首「附録」p20。

58 「清內府藏本『増廣註釋音辯唐柳先生集』考」（『島大言語文化』35、2013 年）。

59 「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷 12 行本考」（『島大言語文化』33、2012 年）。

60 林夕主編『中國著名藏書家書目匯刊・近代卷』第 19 冊（商務印書館 2005 年）p117、未 58a。

袁芳瑛 (1814-1859)、字は漱六、室名は臥雪廬。後にその蔵書は大半が李木齋に帰し、今その大半が北京大学図書館の所蔵となっている。この43巻本も45巻本と共に北大図(＃奉2624)に蔵されている。いずれも袁芳瑛の旧蔵であり、他に北京図書館に蔵する詒訓本(＃2038『新刊詒訓唐柳先生文集』)も「古潭州袁臥雪廬收藏」の蔵書印を有する。袁芳瑛は『柳集』の収蔵者であった。その蔵書の三分の一は孫星衍の旧蔵であり、本書もその一つである。「孫淵如」、名は星衍。これは前掲した孫星衍跋に「宋本。署“童〔宗〕説註釋”者……。『四庫〕書所收有此本，稱“麻沙〔小字〕版，〔尚〕不失其真”，良可寶也」という「宋本」、13行本である。

本書は巻数・行款・缺筆等において45巻本と異なること歴然たるにも拘わらず、なぜ「宋刊本」としたのか不可解である。入手当初は単に孫星衍の説を祖述しただけなのではなかろうか。後に刊刻された『木犀軒藏宋元本書目』<sup>61</sup>では「木犀軒藏宋本書目」(5b)に「『増廣注釋音辨唐柳先生集』四十五卷、外集二卷、附録一卷：宋淳祐本」、「木犀軒藏元本書目」(11b)に「『増廣注釋音辨唐柳先生集』四十三卷、別集二卷、附録二卷」という。「附録二卷」は衍文の可能性があるが、43巻本は「元本」に入れられており、また『木犀軒藏書書録』(手稿本)<sup>62</sup>には「『増廣注釋音辨唐柳先生集』四十三〔卷〕、別集二卷：元刊本。小黑口。半葉十三行，行二十三字。有乾道三年陸之淵「序」。有「孫氏伯淵」、「繡衣執灑大夫印」二白文方印，「臨海洪頤煇過眼」白文方印，「孫忠愍侯祠堂藏書書記」朱文方印」というから、後に元刊本に訂正された。これには後述する傅增湘の影響があるかも知れない。後に当館では「『増廣注釋音辨唐柳先生集』四十三卷、別集二卷：唐柳宗元撰，宋童宗説註釋……潘緯音義。明初刻本〔孫星衍跋，別集卷下有闕葉〕八冊2624」<sup>63</sup>といい、宋刊・元刊とも否定し、明刊本に訂正している。

#### 10：張鈞衡 (1872-1927) 蔵：宋刊45 [3?] 卷13行本

先に触れたように、繆荃孫 (1844-1919) が張鈞衡 (1872-1927) のために撰した『適園藏書志』(民国五年1916) 卷1<sup>64</sup>には、元刊とする音辯本で明末・毛友仁旧蔵「元・延祐間刻」本とは別にまた次のようにいう。

61 『中國著名藏書家書目匯刊・近代卷』第19冊。

62 張玉範整理『木犀軒藏書題記及書録』(北京大学出版社1985年) p263。

63 『北大學圖書館藏古籍善本書目』(北京大学出版社1999年) p417。

64 『海汪邨古籍書目題跋叢刊』第5冊所収(8b、p372下)。

『増廣註釋音辯柳集』四十五卷：宋刊本。

原題“宋・童宗說註釋，……潘緯音義”。宗說……。後人合宗說之註釋、敦頤之音辨、緯之音義，合為此編，別題曰“増廣註釋音辨”。書內又曰“重校添註音辨”，大約宋坊賈為之。每半葉九行，行十七字，高七寸八分、廣五寸一分，白口單邊，上字下刻工姓名。陳氏『書錄解題』云：“姑蘇鄭定刊於嘉興以諸家所注輯為一編，曰集注，曰……。”疑即鄭定所刊。……此本通體完整，彌足珍已，惜闕「外集」二卷，內有歷次補板，亦有黑口者。收藏有「葉氏藏書」朱文方印，有「巡撫宣府關防官」印，葉文恭故物也。

何とも奇妙な一本である。「増廣註釋音辯柳集」と題し、また「重校添註音辨」とあるともいう。しかし9行17字・白口等の版式ならば明らかに別本である。

じつは台湾・中央図書館に蔵する# 09757「『重校添註音辯唐柳先生文集』四十五卷外集二卷三十二冊：宋嘉定間姑蘇鄭氏刊元至明初補修本」<sup>65</sup>がこれに合致する。「葉氏藏書」・「巡撫宣府關防官」・「葉德榮甫世藏」等の印の他に「烏程張氏適園藏書」・「苴園藏書」・「苴伯」等、張鈞衡とその子・乃熊（号は苴園、1891-1942）の印を有し、別の一本で宋版とされる中央図書館蔵# 09756『重校添註音辯唐柳先生文集』（楊紹和旧蔵本）<sup>66</sup>の巻首が劉禹錫「重校添註音辯唐柳先生文集序」（半葉9行、行17字）と「重校添註音辯唐柳先生文集目錄」（9行17字）のみで構成されているのに対して、この一書には巻首の「重校添註音辯唐柳先生文集目錄」（9行17字）の前に陸之淵「柳文音義序」（9行15字）・劉禹錫「唐柳先生文集序」（9行20字）・「増廣註釋音辯唐柳先生集諸賢姓氏」（9行17字）が混入しており、そのために『増廣註釋音辯柳集』本と誤認されたのである。また、混入した音辯本の残葉が45巻本つまり12行本のそれであるならば「宋刊本」と認めてもよからうが、版式は異なり、字様も粗拙で、明らかに明刻本の姿を呈している。したがってこれは重校添註本の巻首の「目錄」以前を補配したものであって音辯本から除外してよい。著録の前半「原題」から「書内」の前まで、つまり「増廣註釋音辯柳集」の説明は、『四庫全書總目』の『増廣註釋音辯柳集』四十三卷の「提要」とほぼ同じであり、これを引用したに過

65 『國家圖書館善本書志初稿・集部』（國家圖書館特藏組編1999年）、p134右。

66 楊紹和『楹書隅録』卷4に「宋刊添註重校音辯唐柳先生文集」、楊紹和『海源閣藏書目』14b「宋本集部」に「添註重校音辯唐柳先生文集」。書名は「重校添註」の誤。周叔弢はこれを正す。『周叔弢批註楹書隅録』（國家圖書館出版社2009年）卷4（p549）、『周叔弢古書經眼録』（國家圖書館出版社2009年）「古書經眼録」（p194）・「宋刻工姓名録」（p452）。



ぎないであろう。「四十五卷」としたのはその『重校添注音辨』本が「闕「外集」二卷」で正集45巻であったからである。重校本は# 09756によれば、『非國語』上下2巻を『別集』とせず、正集に入れて45巻とし、その後に『外集』2巻を置く。

**11：劉承幹 (1882-1963) 藏：宋乾道刊 43 卷 13 行 (?) 本**

劉承幹『吳興劉氏嘉業堂善本書影』（民国一八年1929）「目録」の「卷五 集部・宋本十九」<sup>67</sup>の一つとして解題に「『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十〔三？〕卷附『外集』：宋乾道刊本」とするが、すでに前稿で述べたように誤り<sup>68</sup>。なお、繆荃孫は劉承幹の蔵書のために『嘉業堂蔵書志』（1919年）<sup>69</sup>の撰に加わっており、その中に音辯本は見えない。

**12：袁克文 (1889-1931) 藏：宋麻沙刊宋印 43 卷 12 行本**

中華帝國皇帝袁世凱 (1859-1916) の次子、袁克文の『寒雲手寫所藏宋本提要二十九種』（民国二〇年1931）<sup>70</sup>に次のようにいう。

『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷：宋刊宋印。十二冊。

唐柳宗元撰

南城先生童宗說註釋 次行 新安先生張敦頤音辯 三行 雲間先生潘緯音義 四行 半葉十二行，行二十一字，註雙行，字同。第一冊首，乾道三年陸之淵書序，半葉八行，行十六字。次乾道丁亥潘緯書序，半葉六行，行十二字。次「諸賢姓氏」，半葉六行。左右雙闌，或四周雙闌。線口。版心魚尾，下標「柳文」及卷次，或標「柳」或標「文」，或有減筆「柳」字若「卯、印、夕」諸式。宋諱或缺，或否。無刻工姓氏。

藏印：「友蘭書室」、「陳氏珍藏」每冊首有之。

『柳先生集』，宋麻沙刊本，刻工精妙，亦坊本上乘。元時覆刊改為半葉十三行，藏書家往々誤識為宋刊。蓋真宋刊十二行本殊不易有，今惟木

67 『珍稀古籍書影叢刊之四』（北京図書館出版社2003年）p4。応長興・李性忠主編『嘉業堂志』（国家図書館出版社2008年、p103）にも見えるが、書影はなし。

68 拙稿「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷12行本考」（『鳥大言語文化』33、2012年）p30。

69 呉格整理本、復旦大学出版社1997年。巻4(p518)に明・呂因南本「柳集」の著録が見えるが、董康の執筆。

70 賈貴榮編『宋元版書目題跋輯刊』第3冊（北京図書館出版社2003年）所収（手稿本）p141。

齋師藏有一部，他無聞焉。

「木齋」こと李盛鐸の所蔵する「真宋刊十二行本」とは前稿で紹介した北大図書館蔵（#李 9083）45 卷本であり<sup>71</sup>、袁克文所蔵のものは 43 卷本であって全く異なる。兩人には親交があり、袁克文は李盛鐸蔵本の 45 卷本を知悉していたはずである。ちなみに李盛鐸は袁克文所蔵の宋元刻本 13 種のために題記を作っている<sup>72</sup>。45 卷本を「真宋刊十二行本殊不易有，今惟木齋師藏有一部，他無聞焉」と称揚しながら自己の所蔵する 43 卷本をも「宋刊宋印本」と断定するのは、宋諱缺筆の存在および 45 卷本と同じ半葉 12 行 23 字の版式であることに因る。先賢とは違って 43 卷本であっても 12 行本の存在を知った袁氏はそれを宋刊とし、これまで宋刊とされてきた 13 行本を元刊と考えた。ここに至って清朝以来の定説は大きく転換する。

本書も現存している。北京図書館所蔵の # 8711 「四十三卷、別集二卷、外集二卷、年譜一卷、附録一卷：元刻本、十二冊。十二行、二十一字，小字雙行，同。細黒口，四周雙邊」<sup>73</sup> がそれであり、陸「序」で始まって劉「序」がなく、「佞宋」・「克文之璽」・「寒雲主人」（巻首陸「序」）・「抱存」・「三琴趣齋」（後扉）<sup>74</sup> 等袁克文の蔵書印および袁克文のいう印「友蘭書室」・「陳氏珍藏」（巻首陸「序」）を有する。本書の扉裏には次のような袁克文（号は寒雲）の跋が記されている。『寒雲手寫所蔵宋本提要二十九種』には収めず。今、翻字して掲げる。

柳先生集（篆書体）

此宋麻沙刊本，亦罕見之品。各家著録／多元刊本，若『碩宋慶』・『平津館』所謂宋本，／每半葉皆十三行，亦元本也。叔弢（周暹）師藏／有宋刊『韓文』，與此行字板本皆同。又有／殘宋本『柳集』一卷，即此刻也。丙辰（民國五年 1916）十月，寒雲。

これは『寒雲手寫所蔵宋本提要二十九種』中の著録より前に書かれたものであり、その段階では「宋諱」の有無や李木齋蔵本との巻数の違いにも言及せず、ただ行款によって判断したのであるが、やはり 13 行本を元刊、12 行本を宋刊と考えていた。

71 「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷 12 行本考」（『鳥大言語文化』33、2012 年）。

72 張玉範整理『木犀軒藏書題記及書録』（北京大学出版社 1985 年）の『木犀軒藏書題記』に附録する（p48-53）。

73 『北京圖書館古籍善本書目』p2062。

74 林中清『中國藏書家印鑒』（上海書店出版社 1997 年）「袁克文」p256-267。

「叔弢」とは周暹（1891-1984）の字、その「藏有宋刊『韓文』」なるものは未詳であるが<sup>75</sup>、前稿で指摘したように<sup>76</sup>、周暹は李木斎蔵 45 卷 12 行本を「宋建本」として著録する<sup>77</sup>。袁克文は周叔弢を「師」と呼ぶように親交があったのみならず、『寒雲手寫所藏宋本提要二十九種』は叔弢の出資で出版された<sup>78</sup>。また、これと同版であるという「殘宋本『柳集』一卷」も未詳<sup>79</sup>。

傅增湘は本書を実見しているが<sup>80</sup>、年代鑑定を異にする。「朱文公校昌黎先生」の条で「按：此元刊十二行本，亦與『柳先生集』合刊者，昔年曾見一『柳集』於海上，後為袁寒雲收之，版式正同」<sup>80</sup>という回顧がそれである。袁克文は 43 卷 12 行本を宋刊とするが、傅氏は 12 行本であっても 43 卷本を 45 卷本と區別して元刊とする。袁氏の判断根拠の一つは宋諱缺筆にあるが、「宋諱或缺，或否」というのみで、いかなる字まで缺筆していたのか明示していない。いっぽう傅氏は「宋刊本」45 卷 12 行本の殘本（存五卷：卷 9 至卷 13）を所蔵しており、それは「宋諱貞、徵、恒、桓、匡、敦缺筆」<sup>81</sup>であったという。また、袁氏は周暹蔵『韓文』の行款との一致だけでなく、李盛鐸蔵『柳文』音辯本を知るに至って宋本であることを確信したのであるが、傅氏が注目する点つまり袁本は 43 卷本であって李本が 45 卷本である明らかな相異についてはなぜか触れない。袁氏は「佞宋」の自称が示すように、宋本の蒐集家として、それを懐疑せしめるような不利な相異は敢えて伏せたのではなからうか。

75 『自莊嚴堪書目』（『周叔弢古書經眼録』国家図書館出版社 2009 年、p618）に「昌黎先生集：宋本，存一卷」、「宋刻工姓名録」（p429）・「宋本刻工姓氏」（p452）に自蔵『朱文公校昌黎先生集』宋本 7 行 15 字本が見える。また「古書經眼録」に『昌黎先生集』宋本 13 行 20 字本（p340）・宋本 11 行 20 字本（p377）・宋本 10 行 18 字本（p377）を著録する。

76 「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『增廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷 12 行本考」（『島大言語文化』33、2012 年）。

77 『周叔弢古書經眼録』p114。

78 周景良『丁亥觀書雜記：回憶我的父親周叔弢』（国家図書館出版社 2012 年）「方地山和袁寒雲」（p66）。

79 台湾・中央図書館に民国八年袁克文影抄宋本『唐柳先生外集』一卷（# 15497）を蔵し、表紙に「乙卯七月假沅叔（傅增湘）肅政府藏宋本影寫一過，寒雲」と題するが、この宋本は乾道元年永州刻三十三卷本の殘本であって音辯本ではない。前稿「南宋淳祐九年劉欽序劉怡堂輯註『增廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷 12 行本考」（『島大言語文化』33、2012 年）で音辯本 45 卷 12 行本で「周暹」印の異なるものが複数あることを指摘したが、これと関係があるだろうか。

80 『藏園羣書經眼録（四）』（中華書局 2009 年）卷 12、p882。

81 『藏園羣書經眼録（四）』卷 12、p894。

## 13: 潘宗周 (1867-1939) 蔵: 袁克文 (1889-1931) 旧蔵光宗朝刊 43 卷 12 行本

このように確証を欠く中、客観的根拠を示して比較的詳細に考証しているのが、宝礼堂こと潘宗周の収蔵について商務印書館の張元濟 (1867-1959) が編撰した『寶禮堂宋本書録』(民国二八年 1939)<sup>82</sup>である。

『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷：十二冊。

卷首陸之淵「柳文音義序」，次潘緯「序」，次「注釋諸賢姓氏」，次劉禹錫「序」，次「柳先生年譜」，次「目錄」，(卷1)曰「雅詩歌曲」，曰「賦」，……曰「古今詩」(「四十三卷」)，而殿以「非國語」(「別集」二卷)，<sup>83</sup>凡四十五卷，又「外集」二卷，「附録」二〔一〕卷。卷一首行題書名，以下三行題「南城先生童宗說注釋，新安先生張敦頤音辯，雲間先生潘緯音義」。『四庫總目』云：「之淵「序」但題「柳文音義」。……而別題「増廣註釋音辯唐柳先生集」云云，是本正同。又附録胥山沈晦「序」云：……『四庫』著録僅四十三卷，「非國語」、『外集』、『附録』均已佚去，故(『四庫』)云：“以宗元「本集」、『外集』合為一，分類排列，已非劉禹錫所編之舊第。”殊不知是「本、外集」固在，並未與「本集」合併，館臣僅見殘本，乃有此致疑之語也。是本宋諱遇“廓”字皆不避，蓋刊於光宗之世。潘緯「序」作於乾道丁亥(三年1167)……書成僅二十餘年，坊賈即取而合刊之。余嘗見宋刊殘本『朱文公校昌黎先生集』附「考異」、「釋音」，行款悉同，蓋二集同時合刻者，惜余僅得其一耳。元代覆刻是本，改為半葉十三行、行二十三字。流傳頗多，世人多指為宋刊，蓋緣未見是本，故致誤認。

陳振孫『書錄解題』云：……館臣遽指為“非禹錫舊第”，似非確論。

版式：半葉十二行，行二十三字，小字同。左右雙闌，版心細黑口，雙魚尾，間記大小字數。書名題“柳文幾”、“卯文幾”、“木文幾”、“柳幾”、“文幾”、“卯文幾”、“夕幾”、“木幾”，「別集」加“另”字，「外集」加“外”字，「附

82 『中國歷代書目題跋叢書』2輯所收(2007年)p287。また、張人鳳編『張元濟古籍書目序跋彙編(上)』(商務印書館2003年)『寶禮堂宋本書録』p292。なお、中華書局本『柳宗元集(4)』(1979年)「附録」に『寶禮堂宋本書録』を採録するが、なぜか柳集で採るものは廖瑩中(世綵堂)本のみであって音辯本の著録部分を探っていないのは誤解を与える、看過できない欠陥である。

83 『中國歷代書目題跋叢書』所収の柳向春標点本は「殿以「非國語」。凡四十五卷」と断句するが、ここは『非國語』(=「別集」)までが計四十五卷なのであって「。」ではなく、張人鳳編本のような「、」で断句すべきである。

録」稱“外附”或“外録”。

宋諱：玄、朗、弘、匡、筐、恆、暉、恒、貞、偵、楨、徵、讓、戎、勗、桓、完、構、購、覲、遑、慎等字闕筆。

「附録」二卷の「二」は「一」の誤<sup>84</sup>。鄭氏節録本『寶禮堂宋元本書目』<sup>85</sup>（民國三〇年）にも『增廣注釋音辯唐柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷：十二冊、宋刊本」とする。袁克文の12行本宋刊説を受け、しかも宋諱をはじめとする本書の特徴を袁氏以上に詳細に著録して『四庫總目』の説を徹底して批判し、清朝以来の定説を修正する。ただし前述したように、『四庫總目』が「四十三卷」としたのは「館臣僅見殘本」であったわけでない。

じつはこれこそ北京図書館所蔵# 8711、先の袁克文旧蔵本である。『北京圖書館古籍善本書目』（1989年）では捐贈者名は削除されているが、『北京圖書館善本書目』<sup>86</sup>に「四十三卷、別集二卷、外集二卷、年譜一卷、附録一卷：元刻本、十二冊。潘捐。八七一」、『北京圖書館古籍善本書目』<sup>87</sup>に「十二行二十一字」「八七一」という。たしかに巻首は陸「序」、潘「序」、「諸賢姓氏」、劉「序」、「年譜」、「目錄」の順に編次されている。袁克文蔵本はその7割近くを潘宗周が購入し、新中国成立直後の1951年に子息潘世滋（1906-?）から国家に寄贈され、北京図書館に渡った<sup>88</sup>。これはその一つである。

#### 楊紹和（1830-1875）旧蔵本との混同

最近に至ってもこの潘宗周旧蔵音辯本を楊紹和旧蔵本と考えるものがあるので、ここでその非を明らかにしておく。楊紹和『楹書隅録』巻4（同治八年1869）<sup>89</sup>に

元本『增廣注釋音辯唐柳先生集』四十三卷、別集二卷：十二冊，二函。

每半葉十三行，行二十三字。與元槧『文公校正昌黎集』板式、字體纖毫弗差，蓋二集同時並出也。予藏明代覆本，列入『海源閣目』中，即『四庫全書提要』所謂“頗多譌字”者，此猶是元代刊原帙。張氏『藏

84 『中國歷代書目題跋叢書』本は「二卷」について「校勘記」（p343）に「題名著「附録一卷」，二者必有一訛，因未見原書，不能遽定」とするが、「二」は「一」の訛字。

85 『中國著名藏書家書目匯刊・近代卷』第24冊所収p347。

86 中華書局1959年、「集部・唐五代別集類」（23a）。

87 中華書局1989年、「集部・唐五代別集類」（p2062）。

88 冀淑英『冀淑英古籍善本十五講』（国家図書館出版社2009年）「潘氏寶禮堂」p201、p203。

89 『周叔弢批註楹書隅録』（国家図書館出版社2009年影印）巻4（p553）のこの条には批注はなし。

書志』著録：有毛仁友「跋」云“延祐間刻”，當即此本，而佚其『外集』、『附録』耳。卷首有「□塘王授圖書」、「陳氏道復」、「復生印」各印。とあるのについて王紹曾（1910-2007）は次のように補足する<sup>90</sup>。

〔補〕此本散出後歸潘明訓，轉歸北圖，『北京圖書館善本書目』著録作“四十三卷、別集二卷、外集二卷、年譜一卷”，題“元刻本，十二冊”。據冀淑英先生云：“北京圖書館另有凌志斌捐一部：‘四十三卷、外集二卷、附録一卷，題元刻本。『目錄』、卷三至四、三十二至三十八配明初刻本。二十冊。’非海源閣書。”見「二覆王紹曾書」。

また、楊紹和『海源閣宋元秘本書目』の「元本『增廣註釋音辯唐柳先生集』四十五卷、別集二卷：十二冊，二函」<sup>91</sup>についても

〔補〕此本見『隅録』卷四。散出後歸潘明訓，轉歸北圖，『北圖善本書目』著録，題“四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷，元刻本，十二冊”。というほぼ同じ文が見え、さらに「海源閣書散出時，潘氏收得五種，……元本『增廣註釋音辯唐柳先生集』。……解放後由其哲嗣潘世滋（復旦大學教授）捐獻國家，入藏北京圖書館」<sup>92</sup>ともいい、この説は祖述されて今日に至る<sup>93</sup>。

潘宗周、字は明訓。王紹曾等の説によれば、潘氏蔵音辯本は楊紹和旧蔵のものであり、今は北京図書館に所蔵されている。これは冀淑英（1920-2001）の「潘捐元本『增廣註釋音辯唐柳先生集』係海源閣遺書、『楹書隅録』著録」<sup>94</sup>に拠るらしいが、『北京圖書館古籍善本書目』（1989年）にそのような「元刻本，十二冊」は記載されておらず<sup>95</sup>、ここでいうものは『北京圖書館善本書目』（1959年）であり<sup>96</sup>、その巻6葉23aに「元刻本、十二冊。潘捐。八七一—」とあるのを指す。

90 王紹曾・崔国光等整理訂補『訂補海源閣書五種（上）』（齊魯書社2002年）所収p237。

91 『訂補海源閣書五種（上）』p721。

92 『訂補海源閣書五種（下）』「後記」p1427。

93 丁延峰『海源閣藏書研究』（商務印書館2012年）「藏書の散佚與歸宿」（p480）にはほぼ同文が見える。

94 『訂補海源閣書五種（下）』の「附録」に収める「冀淑英先生有關海源閣書目覆王紹曾書」の「二」の「附：冀淑英先生答有關海源閣書目問」p1338。また同書簡は『冀淑英文集』（北京図書館出版社2004年）にも附録されている（p412）。

95 1989年、p2062-p2064。

96 『訂補海源閣書五種（下）』の「冀淑英先生有關海源閣書目覆王紹曾書」の「一」（1987年）に「五九年出版之『北京圖書館善本書目』（p1335）、「後記」（p1406）に「核査『北京圖書館善本書目』（一九五九年中華書局排印本）。また、『中國訪書志（2）』（p276下）の四十三卷12行本について「北京図書館蔵本（潘氏宝礼堂旧蔵、元刊と著録、潘録に宋刊と著録）」も同じ。

しかしこれには混同による多くの誤りがあり、それは音辯本の系統の複雑さを反映している。

まず、楊藏本は「十三行」本であるが、潘藏本は「十二行」であった。「三」が「二」の誤字でないことは張氏自身の指摘「元代覆刻是本、改為半葉十三行、行二十三字」から明白である。また、「四十五卷、別集二卷」が「四十三卷、別集二卷」に変わっているが、「此本見『隅録』卷四」という『楹書隅録』のみならず、楊紹和『宋存書室宋元秘本書目』・『海源閣藏書目』ともに「四十三卷、別集二卷：十二冊、二函」<sup>97</sup>とあり、かつ「佚其『外集』、『附録』耳」であるから、「正集」四十三卷が正しい。「五」は「三」の誤字。次に、北京図書館所蔵についても、前にいう「四十三卷、別集二卷、外集二卷、年譜一卷」「元刻本、十二冊」と後にいう「四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷、元刻本、十二冊」は矛盾する。しかし、いずれであるにしろ、そもそもいずれも楊紹和のいう「正集」四十三卷・「別集」二卷・13行本に一致しない。

周知の如く楊氏旧藏本は多くが故宮博物院に収蔵されている。じつはこの13行音辯本もその一つ（# 13837）であり、そのことも比較的よく知られている<sup>98</sup>。『楹書隅録』にいう版式や「□塘王授圖書」等旧藏者の印および楊紹和自身の蔵書印、いずれも故宮蔵本に一致する。北図# 8711は袁克文から潘宗周に渡って北京図書館に帰した12行本であって楊氏旧藏本ではない。音辯本に数種類あり、巻・行が微妙に異なって複雑であることが誤解を招いた。

この北京図書館蔵潘氏・袁氏旧藏本は2013年3月公布の「第四批國家珍貴古籍名録」でリスト入りし、『北京圖書館古籍善本書目』と同じく「元刻本」と鑑定されている。

#### 14：上海図書館蔵：宋刊 43 卷 12 行本

旧藏者は未詳であるが、上海図書館所蔵に音辯本の43卷12行本がある<sup>99</sup>。

増廣注釋音辯唐柳先生集四十三卷別集二卷外集二卷附録一卷 唐・柳宗元撰、宋・童宗說注釋、張敦頤音辯、潘緯音義。宋刻本。半葉十二行。行三十一字。存四卷 十至十三。

「宋刻本」とする根拠は不明。12行本であることに拠ったものか。また、巻

97 『訂補海源閣書五種（上）』p613、p656。

98 阿部隆一『中國訪書志（3）』「故宮博物院藏沈氏研易樓捐贈宋元版本志」p734、『國立故宮博物院藏沈氏研易樓善本圖書』（故宮博物院1986年）「元刊本」p136。

99 『上海圖書館善本書目』（上海圖書館編印1957年）卷4「集部」3b。

10 から巻 13 までの残本であれば、12 行本であっても「四十三巻」「別集二巻」つまり 43 巻本と断定する確証はない。45 巻本の存在は広くは知られておらず、単に通説に拠った判断ではなからうか。これを含む現存本については後文で詳考する。

## Ⅱ 43 巻 12 行本“宋刊”説と四部叢刊 13 行本

このように 43 巻 12 行本と 43 巻 13 行本の年代について清代以来の著録には相違が見られる。その代表的なものが民国期に活躍した書誌学の大家、張元済 (1867-1959) と傅増湘 (1872-1949) の説である。

### 張元済の 43 巻 12 行本“宋刊”説とその問題

先に掲げた張元済『寶禮堂宋本書録』には、43 巻 12 行本の特徴と宋刊とする年代鑑定に及んで、いくつか重要な指摘が見られる。

1) 『天祿琳琅書目後編』では行款を明示せず、また先に見て来た清人の著録で 43 巻本の行款を明示するものはいずれも半葉 13 行・行 23 字であったが、この潘宗周蔵本 = 袁克文旧蔵本は 12 行・行 21 字であって明らかに異なる版本である。「元代覆刻是本，改為半葉十三行、行二十三字。流傳頗多，世人多指為宋刊，緣未見是本，故致誤認」というのは、たとえば莫友芝『邵亭知見傳本書目』がそうであり、張元済はその書に批注しているが<sup>100</sup>、なぜかそこではこのことを取り上げていない。当時は 13 行本を宋刊本と考える向きがあり、そのような中、張氏は 12 行本の発見によってそれを宋刊とし、13 行本を元刊に繰り下げたのである。同様の理解はすでに袁克文が示しており、張元済は旧蔵者袁氏の説を補強するものであった。

しかしそれは 43 巻本であって李木齋所蔵の淳祐九年序刊本は 45 巻本である。袁氏は 12 行本であるという共通の特徴に注目して 45 巻本である相異には触れず、また張元済も李氏蔵本との関係には全く言及していない。張元済の当時、李氏蔵本は知られていなかったとは考えにくい。すでに袁氏が言及しており、また陶湘『涉園所見宋版書影』<sup>101</sup> 第 2 輯は書影をもって紹介している。出版は民国二六年七月。張元済の著録よりも二年早い。

2) では、12 行本を宋刊と断定した根拠は何なのか。先ず宋諱缺筆の存在が

100 『張元済古籍書目序跋彙編（上）』所収 p1-p14。

101 『珍稀古籍書影叢刊之三』（北京図書館出版社 2009 年）所収（p114）。他に江蘇広陵古籍刻印社 1998 年影印本、江蘇古籍出版社 2001 年影印本がある。



考えられる。張元済は書中に見える宋諱缺筆をつぶさに調べて「玄、朗、弘、匡……桓、完、構、搆、購、靚、邁、慎等字闕筆」と枚举し、「遇“廓”字皆不避，蓋刊於光宗之世」と判断した。親交のあった瞿啓甲（1873-1939）が張元済『涵芬樓燼餘書録』に「序」を寄せ、その「目錄之學」の方法を評して「詳記宋諱闕筆以定年代，更考刻工姓名以斷地域」<sup>102</sup>と称する所以である。なお、張氏主宰の商務印書館によって影印された四部叢刊本では瞿氏鉄琴銅劍樓が提供した蔵書が多く使われた<sup>103</sup>。

先に見て来た中で宋刊説では、錢大昕（1728-1804）が宋諱缺筆に言及していたが巻数・行款等は取上げず、あるいは『天祿琳琅書日後編』Aが「較其闕筆字，的是南宋中葉本」、また袁克文が「宋諱或缺，或否」といって曖昧であったのを除いて、それを明示するものはなかった。それはなぜなのか。他にもない宋諱缺筆がなかったからであろう。そこでこの12行本には宋諱缺筆のあることによって宋刊とし、その結果、これまで宋刊とされて来た13行本を缺筆がないことによって元刊と見做したのと考えられる。ただし張氏が「廓」字の不缺筆を根拠に「刊於光宗之世」と断定するのには問題がある。

「廓」字を挙げたのはそれが寧宗（1194-1224）の諱「擴」と同音であったことに由るが、その不缺筆は寧宗朝中かそれ以前の刻刊であるとは言えても光宗朝（1189-1194）であることの十分条件にはならない<sup>104</sup>。そのように断定するためには光宗の諱「惇」字やそれと同音の字が缺筆されていなければならない。しかし何故かそれには全く触れず、また「慎等字闕筆」といって挙げてもない。「慎」字は孝宗（1162-1189）の諱「昫」と同音。「惇」字と同音の「敦」字は集中に見えないのではなく、逆に頻出する。かりに宋諱缺筆が「慎」字までであ

102 『涵芬樓燼餘書録』（商務印書館1951年）の「瞿序」（民国二六年1937）。張人鳳編『張元済古籍書目序跋彙編（中）』（商務印書館2003年）所収p839。

103 仲偉行等『鐵琴銅劍樓研究文獻集』（上海古籍出版社1997年、p117-123）、曹培根『瞿氏鐵琴銅劍樓研究』（蘇州大学出版社2008年、p166-172）に詳しい。

104 劉漢忠『柳集版本叢考（續六）』（『廣西地方志』2011年4期、p31）、『柳宗元著作版本圖考』（廣西人民出版社2013年、p53）は音辯本の「宋刻本版式特點」について傅增湘『藏園群書經眼録』・李盛鐸『木犀軒藏書題記及書録』・『張元済古籍書目序跋彙編』に記載するものを挙げて「『張元済古籍書目序跋彙編』著録……稱此書刊於宋光宗之世。這三部書的著録，當為同一版本」とするが、前稿で述べたように傅增湘は二種著録しており、傅Bは李盛鐸藏45卷本の「經眼」した著録であり、傅A（殘五卷本）もその可能性が高いとしても、張元済の著録は潘宗周藏本に拠っていうものであり、それは43卷本であって全く異なる。また、「宋刻本版式特點」について『藏園群書經眼録』に「一是“增注姓氏以白文別之”，即注釋者名氏為白文粗字」（p31、p53）とするが、注釈者の姓氏が白文であることは元刻・明刻の諸本も同じである。

って「敦」字が不缺筆ならば、刊刻は光宗朝以前、孝宗朝紹熙間ということになる。早く銭大昕『潛研堂序跋』は「此本於“敦”字尚未缺筆、當刊行於乾道、淳熙之朝矣」といつていた。なぜ「敦」字の避諱の有無を明確にしていないのか不可解であるが、少なくとも「慎」字缺筆・「廓」字不缺筆は確認できたらしいから、この限りでは南宋刻本とは見做されるわけである。

3) 本書では陸之淵「柳文音義序」が冒頭にあって劉禹錫「序」は「注釋諸賢姓氏」の後、「柳先生年譜」の前に編次されていたが、宋刊45巻本では劉「序」は巻首の冒頭に配されており、『天祿琳琅書目』巻6「元版集部」著録の43巻本も「前唐劉禹錫「原序」、宋陸之淵「序」並「編集姓氏」<sup>105</sup>であって、本来そうであるべき性質のものである。これについては装丁の際に移動した可能性も考えられなくはないが、たしかに伝世諸本の中には「注釋諸賢姓氏」の後に置くものがあり、また劉「序」そのものを有さず、陸「序」のみのものもある。ちなみに四部叢刊本は陸「序」・劉「序」・「姓氏」・「目録」の順である。そうならばこのような巻首中の編次も版本の種類や関係を認定する要素となり得るかも知れない。

4) その他の特徴として、一部に大小字数が記されていたこと、また版心では「柳／柳」字以外にその略である「木」・「卯」・「夕」等が使われていたことが知られる。これらは先行の著録に言及がないものとして注目される。45巻本には見られないが、たしかに43巻12行本にはそのような刊本がある。前述した『天祿琳琅書目後編』A= 故宮博物院# 13833がそうであり、一部に大小字数が記され、かつ版心でも「木」等が使われていた。ただし陸「序」・「姓氏」・「年譜」・「目録」の順であって、潘「序」・劉「序」ではない。つまり巻首中の編次が異なる。

張元済がこの潘宗周蔵12字本を宋刊本と断定するに至ったのには上海涵芬樓所蔵の音辯本との相違への注目が考えられる<sup>106</sup>。それを影印した四部叢刊本は宋諱不缺筆だけでなく、43巻の13行本であった。12行本が13行本になったのは「元代覆刻是本」という覆刻の関係などではなく、全くの改版なのであ

105 『中國歷代書目題跋叢書』第2輯所收、p187。

106 四部叢刊本が今日の通行本になっているが、使用者は注意が必要である。上海本と後の台湾本の間には相異があり、同版でないことはつとに新海一「『増廣註釋音辯唐柳先生集』校讎」（『柳文研究序説』汲古書院1987年、p199、p201）で指摘されている。また、拙著『柳宗元永州山水遊記考』（中文出版社1996年、p126）を参照。本稿では上海本（四部叢刊初編本1926年）を使用。

るが、果たして四部叢刊本は元刊なのかどうか。

#### 四部叢刊 13 行本と刊記「戊辰」刻 13 行本

1) 元・天曆元年 (1328) :

張元濟が四部叢刊 43 卷 13 行本を元刊本と断定したのには別に根拠があった。張元濟『涵芬樓燼餘書録』<sup>107</sup> (民国二六年 1937) に次のようにいう。

『増廣注釋音辯唐柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷：唐・柳宗元撰，宋・童宗說……。元・天曆刊本。十八冊。

題“南城先生……”。前有乾道三年陸之淵「序」……。「序」中不及童氏注釋、張氏音辯，蓋當時原自別行，迨王宗玉始合而成編，故題曰“増廣”。書與『韓集』并刻，行款悉同。

四部叢刊本を元刊本、しかも天曆年間に特定する。その根拠はひとえに『韓集』との行款の同一にあり、四部叢刊本『韓集』つまり『朱文公校昌黎先生文集』四十卷外集十卷遺文一卷：元・天曆刊本。十八冊』については「按李「序」後有書林王宗玉識語，録後題“歲舍戊辰”，當是元天曆年刊本」というから、13 行本の合刻本『韓集』の李漢「序」の後に次のような刊記があったことに拠る。

韓、柳二先生文集，行世久矣。唐季歷代以來，儒人文士莫不宗之，以為文章之模範、序記之矜式。惜乎，舊板漫滅，續集遺闕，讀者憾焉。本堂廣求，訪到善本，卷集全備。宗玉喜不自勝，命工鼎新鏤梓，以廣其傳，使四方文學君子得觀二先生之全文，不致湮沒，豈不偉歎。幸鑑。歲舍戊辰十月吉旦，書林王宗玉謹識。

たしかに「元天曆元年」は「歲舍戊辰」ではある。しかしその逆は必ずしも真ならず。「歲舍戊辰」は明の洪武二一年 (1388) や正統十三年 (1448) があるにも拘わらず、なぜこれを明刊とせずに、元刊と考えたのか。それにはおそらく瞿啓甲やその祖父瞿鏞 (1799-1863) の影響がある。

すでに『四部叢刊叢録』(民国十一年)<sup>108</sup>でも涵芬樓燼 43 卷本を「元刊本」とする理由として「此本款式與『韓集』同」を挙げ、『朱文公校昌黎先生文集』四十卷外集十卷遺文一卷八冊：上海涵芬樓藏元刊本』の条に次のようにいう。

卷首列朱子序，次王伯大序，次李漢序，次汪季路書，又編輯「凡例」。朱子『韓

107 張人鳳編『張元濟古籍書目序跋彙編(中)』(商務印書館 2003 年) 所收 p661。『涵芬樓燼餘書録』は 1951 年の出版であるが、瞿啓甲「序」は「丁丑」(民国二六年) の作。

108 上海商務印書館、32a。

文考異』本別行，王氏取以散入本文，雖非舊觀，良便檢尋<sup>109</sup>。王氏所撰「音釋」亦散入句下。『鐵琴銅劍樓書目』謂：王（伯大）氏「音釋」原附各篇之末，元時坊肆為之散入句下。嘗見一殘宋本，其「音釋」已流入句下矣。宋本每半葉十二行，行大小皆二十一字，黑綫口。元本即從此出，惟易其行格耳。此與『柳文』均，不知何人所編，大約“元時坊肆所為”。每葉二十六行，每行大小均二十三字，注引“某云”皆作白文，粗黑線口。李「序」後有書林王宗玉謹識七行，題“歲舍戊辰”，天曆元年刊本也。

『鐵琴銅劍樓藏書目錄』（光緒二四年 1898）二十四卷<sup>110</sup>は瞿鏞『恬裕齋書目』稿本四卷に始まって瞿啓甲に至って完成し、刊刻されたものであり、それに「其（王伯大）「音釋」原附各篇末，此亦散入各句，乃元時書肆本」と見える。なお、瞿鏞旧蔵の『柳集』音辯本の方は北京図書館に所蔵（# 3549）されており、当館では

『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十三卷、別集二卷、外集二卷、附録一卷：  
明初刻本。嚴虞悖跋。十二冊。十三行，二十三字。小字雙行，同。四周雙邊。

と鑑定されている<sup>111</sup>。「嚴虞悖跋」は計5条、『鐵琴銅劍樓宋元本書影識語』巻4にも採録されているが<sup>112</sup>、いずれも読書記・日誌の類であり、版本についての言及は見られない。張元濟には瞿氏『藏書目錄』によってすでに13行本を元刊とするという認識があり、そこで13行本にある刊記の「戊辰」を元代に求めて天曆元年と解したものと思われる。しかし瞿氏自身は『韓集』の刊記については触れておらず、また瞿氏所蔵の『韓集』に王宗玉「戊辰」の刊記はなかったはずである。そのことは瞿鏞『鐵琴銅劍樓藏宋元書目』<sup>113</sup>（光緒二三年）に『朱文公校昌黎先生文集』四十卷外集十卷遺文一卷：元刊本。巻首有「林鴻之印」、「黃琴六讀書記」二朱記、「増廣註釋音辯唐柳先生集」四十三巻別

109 『重印四部叢刊書録』（上海商務印書館 1929 年）31b もほぼ同文であるが、「雖非舊觀，良便檢尋」を刪去。

110 瞿鳳起覆校本巻 19、上海古籍出版社 2000 年、p505。

111 『北京圖書館古籍善本書目』p2063。# 3549 は『北京圖書館善本書目』（1959 年）に著録されているが、捐贈者の名は記されておらず、また『鐵琴銅劍樓研究文獻集』の「第一次呈進京師圖書館書籍」・「第四次捐贈北京圖書館書籍」等（p75-85）、「北京圖書館善本書目」“瞿捐”書目摘要（p87-100）にも見えない。

112 広文書局『書目四編』所収影印 1970 年、p 229。その藏書印は記されているが、旧蔵者の題跋等はなかったのか、瞿啓甲輯『鐵琴銅劍樓藏書題跋集録』（『中國歷代書目題跋叢書』第 2 輯所収）には見えない。

113 『宋元版書目題跋輯刊（2）』所収、集部巻 2b（p207）、3a（p208）。

集二卷外集二卷附録一卷：元刊本。巻首有「嚴虞惇印」、「正學圖書」、「鳳山草堂」諸朱記（北京図書館蔵# 3549）というのみであること、また瞿啓甲『鐵琴銅劍樓宋元本書影』中の丁祖蔭（1871-1930）撰「識語」（民国十年1921）<sup>114</sup> 卷4「元本集部」に次のようにいうことによっても推測される。

『朱文公校昌黎先生文集』四十卷外集十卷遺文一卷：元刊本。

前有李漢「序」……。謂：王氏重編朱子『考異』本，將「考異」散入集中各句下，曾刻於南劍州。此則并將「音釋」散入各句下，乃元代閩中麻沙坊本，非王氏之舊矣。舊為邑中黃琴六藏書：巻首有「林鴻之印」、「黃琴六讀書記」二朱記。

『增廣註釋音辨唐柳先生集』四十三卷別集二卷外集二卷附録一卷：元刊本。

前有劉禹錫及陸之淵「音義序」，合「本集」、「外集」為一，為坊估所為，已非劉氏原編之舊。款式、字體，全同前『昌黎集』，蓋同時所刻也。『愛日精廬藏書志』載毛友仁跋，所云「延祐間刻本」，行款正同，當即此書。舊為邑中嚴氏藏書，卷末有康熙歲次壬戌秋八月二十有三日戊戌嚴虞惇閱記題識二行。

やはり刊記の存在は知られていない。これによれば瞿鏞・瞿啓甲等が『韓集』・『柳集』の13行合刻本を元刊としたのには別に拠るところがあった。それは王宗玉の刊記ではなく、張金吾『愛日精廬藏書志』が引く毛友仁の「元延祐間刻」説である。張金吾の蔵書は一部が鉄琴銅劍樓に収蔵されていた<sup>115</sup>。しかし延祐年間（1314-1320）に歳次「戊辰」はない。張元済は毛友仁の説を知らず、ただ瞿氏や丁祖蔭の説によって元刊とした上で、刊記によってそれを元の「戊辰」に求めて天曆元年と推断したのである。丁祖蔭『重修常昭合志』十八巻は鉄琴銅劍所蔵の文献を多く利用しており、その巻18「藝文志」は『恬裕齋書目』に多く拠っているという<sup>116</sup>。

しかし合刻本の『韓集』にある王宗玉刊記にいう「戊辰」の年代については諸説がある。

2) 明・洪武二一年（1388）：

傅增湘も『柳集』を『韓集』との合刊本とするが<sup>117</sup>、『韓集』の刊記を掲げて「明

114 広文書局『書目四編』所収影印1970年、13b-14b。

115 仲偉行等『鐵琴銅劍樓研究文獻集』（上海古籍出版社1997年）p59。

116 曹培根『瞿氏鐵琴銅劍樓研究』p205。

117 『藏園羣書經眼録（四）』（中華書局2009年）巻12に「按：此元刊十二行本，亦與『柳先

洪武二十一年戊辰書林王宗玉刊本」<sup>118</sup>とする。萬曼（1903-1971）も基本的にこの立場をとる。後述。

3) 明・正統十三年（1448）：

今日ほぼ定説になっている<sup>119</sup>。それは『韓集』ではなく『柳集』の一本で巻首「諸賢姓氏」の末に「正統戊辰善敬堂刊」1行8字の陰刻木記があり<sup>120</sup>、「戊辰」が一致することに拠る。四部叢刊『柳集』音辯本にはこの木記が書刻されておらず、したがって張元済はその存在を知らなかったのではなからうか。すでに13行本を元刊本であり、『韓集』・『柳集』の合刻本と考える張元済が「戊

生集』合刊者、昔年曾見一『柳集』於海上、後為袁寒雲收之、版式正同」（p882）、13行本についても「按：此乃元明間韓柳合集本、世多有之、余亦藏一帙」（p884）。

118 『藏園群書經眼録（四）』巻12（p 881）、『藏園訂補邵亭知見傳本書目（3）』（中華書局2009年）巻12下（p1020）。

119 史梅岑『中國印刷發展史』（台湾商務印書館1966年、p 87）、阿部隆一『中國訪書志（2）』（p276上）、阿部隆一『慶應大學大學附屬研究所斯道文庫貴重書蒐選・圖録解題』（汲古書院1997年、p130、p132）、瞿冕良『中國古籍版刻辭典』（齊魯書社1999年）「善敬堂」（p596）、劉真倫『韓愈集宋元傳本研究』（中国社会科学出版社2004年、p217）、『第三批國家珍貴古籍名録圖録』（# 08786-8）。早くは葉德輝『書林清話』（宣統三年1911）巻5「明人私刻坊刻書」（岳麓書社1999年、p110）に「正統戊辰十三年刻『増廣註釋音辯唐柳先生集』四十二〔三〕巻、『別集』二巻、『外集』二巻、『附録』一卷、見森『志』」と見えるが、森立之『經籍訪古志』（広文書局「書目宋叢編」民国五六年）に「増廣註釋音辯唐柳先生集二〔四〕十一〔三〕巻、別集二巻、外集二巻、附録一卷。六巻至十二巻缺。松崎謙堂藏。……每半版十三行、廿三字。……「諸賢姓氏」後題“正統戊辰善敬堂刊”」（p215）とあり、巻数が異なる。いずれも誤りで「四十三」が正しい。この松崎謙堂藏残本は慶應大學斯道文庫に帰している。『慶應大學大學附屬研究所斯道文庫貴重書蒐選・圖録解題』# 114（p131下）。

120 『柳宗元著作版本圖考』（p79）は『第三批國家珍貴古籍名録圖録』（# 08786-8）で「正統戊辰善敬堂刊」の木記ありと説明するが、書影が附されていないとしてハーバード大学燕京図書館蔵本（p75）と『第一批』#02042「甘肅省圖書館藏」本（p79）の書影を掲げる。我国では早くから知られており、『慶應大學大學附屬研究所斯道文庫貴重書蒐選』（p172）に書影を収め、また蓬左文庫も一部収蔵（# 114-17イ）する。『中國訪書志（1）』に「斯道文庫本はかなり後の刷印にかかり、善敬堂の刊記は追刻の疑いがある」（p138上）、『中國訪書志（2）』（p277）は台湾・故宮博物院所蔵本について「正統戊辰」と「善敬堂刊」との間に「細い切れ目がある。しかも「善敬堂刊」は埋木の如く見える」と指摘されている。斯道文庫蔵本・蓬左文庫蔵本や甘肅省圖書館蔵本・ハーバード大蔵本にも「細い切れ目」が認められる。ハーバード大蔵本の書扉には「善敬書堂（横書き）増廣註釋／柳文續集（縦書き、二行）」とあり、他本はいずれもこれを欠くから、これが早刻なのではなからうか。ただし巻43後の『別集』は分冊されており、扉には「善敬書堂（横書き）／新刊（横書き）／柳文集註（縦書き）」とあって「新刊／柳文集註」の左右に「柳文舊無善本、今得諸名公増廣註釋音辯、極為明備。三復校正、一□繡梓、使天下學者得以見昌黎、河東二先生文集之大全、豈不為盛時文治之一助云」（四行）という刊記があるから、両扉紙が転倒しているのではなからうか。つまり「柳文集註」の方が正集の前、「柳文續集」が別集等の前にあるのが本来の形であろう。いずれにしても音辯本は明代だけでも重ねて補刻・通修されたことが知られる。

辰」を元代に求め、天曆元年としたのはそのためである。

#### 4) 不同説：

いっぽう『韓集』刊記の王宗玉「戊辰」と『柳集』木記の善敬堂「正統戊辰」を別に考える説もある。萬曼がそうであり、「明版有書林王宗玉與韓集合刻的戊辰（1388）刻本、『涵芬樓燼餘書錄』誤以為元天曆戊辰，其實乃洪武二十一年戊辰也。半葉十三行，小字雙行，行二十三字。又有正統戊辰（1448）善敬堂覆宋本，版頁九行，行十八字，雙框，雙魚尾」<sup>121</sup>という。『韓柳』合刻13行本を洪武二一年刻本とするのは傅增湘の説に拠ったのであろう。たしかに「諸賢〔賢〕姓氏」の末に「正統戊辰善敬堂刊」の木記をもつものが二種類あり、先の所謂「明正統十三年善敬堂刻遞修本」9行本がその一つであるが<sup>122</sup>、この版は13行本と比べて全体的に彫刀が稚拙で字様が粗笨、かつ誤字がすこぶる多い。『四庫全書總目』がいう「舊有明代刊本，頗多譌字」の中でも粗悪なもので、「正統戊辰善敬堂刊」本を、おそらく明代晩期に改版したものであろう。9行本を「正統戊辰善敬堂」本とする萬氏も「正統戊辰善敬堂刊」13行本の存在を知らなかったのである。

このような中、今日でも『柳集』版本研究家の間で元刻説が採られている。『柳宗元著作版本圖考』がそうである<sup>123</sup>。『柳集』の木記「正統戊辰善敬堂刊」と『韓集』の刊記「歲舍戊辰十月吉旦，書林王宗玉謹識戊辰」における「戊辰」の一致はすでに明・正統十三年説の一つの客観的根拠となり得るが、さらにこれを補足しておく。

まず善敬堂は明代を通して活躍した書坊であった。管見の及ぶ所では、元・劉応李（棨）編『新編事文類聚翰墨全書』に刊記「正統元年丙辰（1436）善敬書堂新刊」があり<sup>124</sup>、朱子『家禮』は景泰元年（1450）善敬書堂刊<sup>125</sup>、張光啓訂

121 萬曼『唐集斂錄』（中華書局1980年、p193-194）、また『韓集』についても「明代的刻本，有……洪武二十一年（1388）書林王宗玉刻本……『四部叢刊』據王宗玉本影印，誤以王宗玉譯語歲舍戊辰為元天曆元年，定為元槧本，其實明初刻本也」（p179）。

122 『第二批』#05388-91に書影あり。本書も我が国内閣文庫蔵#1674・#11720等、多く伝存する。

123 「民國商務印書館『四部叢刊』本，也是以元代翻刻麻沙本為影印底本」（p56）という。ただし本稿で後述する傅增湘『藏園群書經眼録』の『韓集』刊記「明洪武二十一年戊辰」については「按：此為正統十三年戊辰之誤」（p81）というから、張説「題“歲舍戊辰”，天曆元年刊本也」をも否定しているわけであり、つまり『韓集』を明正統三年刻本、『柳集』を元天曆元年刻本と考えていることになり、大いに矛盾する。

124 米沢市立図書館蔵本。『米澤善本の研究と解題』（市立米澤図書館1958年、p147下）。

125 彭衛民『家禮』朝鮮化進路』（『中國史研究』第83輯、2013年、p107注2）。

正『増修附註資治通鑑節要續編』に刊記「景泰歲在玄默浚灘（三年1452）孟夏善敬書堂新栞」があり<sup>126</sup>、胡広等奉勅撰『五經大全』は天順八年（1464）善敬堂覆刊<sup>127</sup>、『韓集』・『柳集』合刻二〇卷本は「弘治十五年（1502）王氏善敬堂刊」<sup>128</sup>、また劉応李編『新編事文類聚翰墨全書』には正徳元年（1506）王氏善敬書堂刊本が<sup>129</sup>、『五經大全』にも正徳八年善敬堂刊本があるという<sup>130</sup>。楊蕓『新刊鋤雲楊先生地理心法内篇』を「萬曆十一年（1583）建陽書林善敬堂王興泉刊」とするもの刊記があつてのことであろう<sup>131</sup>。さらに、林希元『新刊全補四書存疑』は万曆間善敬堂刻という<sup>132</sup>。明代の晩期に及ぶ。しかも善敬堂は「王氏善敬堂」<sup>133</sup>・「建陽書林善敬堂王興泉」が示すように建陽王氏の屋号であり<sup>134</sup>、また現存する音辯本の紙質や版式・字様から見ても建本、所謂「麻沙本」であることは疑いない<sup>135</sup>。建陽王氏はほぼ明代を通して、少なくとも正統年間以後、弘治十二年（1499）の建陽の大火を経た後も、書坊「善敬堂」を世襲していたことになる<sup>136</sup>。

126 『第二批國家珍貴古籍名録圖録（4）』# 03713（p270）。

127 故宮博物院藏（#故善012603-012630）。

128 瞿冕良『中國古籍版刻辭典』（齊魯書社1999年）「善敬堂」（p596）、『第二批國家珍貴古籍名録圖録』（#05333、#05334、p256）による。ただし共に二〇卷本『韓集』（『朱文公校昌黎先生文集』）のみを挙げるが、正集二〇卷本には『第二批國家珍貴古籍名録圖録（7）』# 05392-05394『柳』（p268）、『第三批國家珍貴古籍名録圖録（5）』# 08761『韓』（p291）、台湾・中央図書館蔵# 09706『韓』・# 09755『柳』（蔵書印は同じ）など多い。

129 『内閣文庫漢籍分類目録』（内閣文庫編印1956年、p292下）、『大阪天満宮御文庫漢籍分類目録』（大阪天満宮1977年、p35上）。両蔵本とも未見であり、木記の有無は未確認。

130 瞿冕良『中國古籍版刻辭典』（p596）。

131 中国科学院図書館蔵。『中國古籍善本總目・子部』（p916）、謝水順等『福建古代刻書』（福建人民出版社1997年、p331）、張秀民『（插圖珍藏增訂本）中國印刷史（上）』（浙江古籍出版社2006年、p269）、『福建省志・出版志』（福建人民出版社2008年）「第二節、民營出版機構」「一、古代刻書坊肆」。

132 瞿冕良『中國古籍版刻辭典』（p596）。

133 『第二批國家珍貴古籍名録圖録』・『第三批國家珍貴古籍名録圖録（5）』や台湾・中央図書館等蔵本の『韓』・『柳』各二〇卷本には木記は無いらしく、「弘治十五年」は未確認。

134 『柳宗元著作版本圖考』は木記「正統戊辰善敬堂刊」を有する13行本と9行本を考証して「山西太原“善敬堂”向有“書林”之稱」（p80）とする。

135 すでに阿部隆一『中國訪書志（1）』に「本書（音辯本明刊明修本）は宋末から明中期に至る間に建陽の諸書坊に於て、韓文と共に、幾種もの版が続刊され、その全てが覆刻と通修の方法を重ねたために、諸版行款版式を殆ど同じうしてその関係が極めて複雑で、その異同が識別し難い」（p138上）、『中國訪書志（3）』に「以上六部（『韓集』明刊本）は皆元後至元七年日新書堂刊本を祖とする覆刻の関係にある麻沙本なので、従来の諸家目録は殆ど同版の元槧と見なしているいるが、皆明刊である」（p552上）とする。

136 『慶應大學大學附屬研究所道文庫貴重書蒐選・圖録解題』（p132上）に「明の覆刻本は



本記「正統戊辰善敬堂刊」は「元刊と見せかけるために剝去されたものか存する例が少なく」<sup>137</sup>、それには本記部分の罫線が9字分消されている版と本記の枠のみ残している版、つまりいずれも本記の存在が推測可能な版、さらに本記と枠はなく罫線の存在する版という、少なくとも三種類がある。前二者が先にも触れた中央図書館# 09748・# 09748と北京図書館# 6251・# 18407であり、四部叢刊本は後者である。両者は字様も全体的にやや異なっており、「新」・「汪」・「潘」等の字や版心の葉第「四」の字に顕著である。前者の字様は本記本に酷似しているから同版を用いて本記部分を削った後印本と認められるが、四部叢刊本は似て非なるものであり、明刊本にあっても正統「戊辰」十三年（1448）刊本よりも後の刊刻であろう<sup>138</sup>。この推測が正しいことは、本稿で12行本の現存を確認した後、次稿での諸本対校によって四部叢刊本に誤字・俗字・重量字が「正統」刊記本より多いことから証明可能である。

#### 傅増湘の43巻12行本“元刊”説とその問題

では、傅増湘の説はどうか。『柳集』音辯本の諸版を経眼したのは傅氏が最も多いのではなかろうか。自蔵本を含む計六部を挙げている<sup>139</sup>。今それらを巻数・行款等の特徴から分類すると次の表のようになる。

ただし著録に整合を欠く部分がある。A版（残本）について『藏園群書經眼録』で「黒口」とするのはB版＝李木斎藏淳祐九年刊本の「細黒口」と区別しているようであるが、『藏園訂補郎亭知見傳本書目』では「細黒口」とする。また宋諱缺筆についても混乱しており、『經眼録』ではA版を「宋諱貞、微、

---

正統一三年に善敬堂から刊刻された可能性があるとみえる。ただし、王宗玉と善敬堂の関係は未明である。また、方彦寿『建陽刻書史』（中国社会科学出版社2003年）は善敬書堂を「明前期建陽書坊」の一つとして「疑書坊主姓王、萬曆間有建陽王興泉善敬堂從事刻書、此當為其祖輩、但缺乏旁證、故此不作定論」（p281）という。挙げる所は「正統戊辰善敬堂刊」本記の9行本と『増修附註資治通鑑節要續編』のみ。

137 『慶應大學大學附屬研究所道文庫貴重書蒐選・圖録解題』（p132上）。

138 四部叢刊本は罫線が三箇所断しており、『慶應大學大學附屬研究所道文庫貴重書蒐選・圖録解題』（p132下）に「正統戊辰善敬堂刊」刊記本の「更なる覆刻本である。姓氏の末行は空行で、その中間の罫の上方の二箇所切れ目が四部叢刊本と一致する。ただし四部叢刊本の本文は明正統一三年刊本で、首目の部分が補配されているらしい。字様が固みを増し、粗黒口もやや太さを増して、正統一三年より刊刻が降ることを如実に示している」といい、また『中國訪書志（1）』に「正統刊本と同版には……四部叢刊本があり、従来いずれも元刊本とされているが、最初の方は元刊のかなり忠実な覆刻の為に版式字様に元刊が明刊かの区別が付き難いが、後に行くに従って明風が濃厚になって行く」（p138上）と指摘する。

139 『藏園群書經眼録（4）』巻12（p 894-896）、『藏園訂補郎亭知見傳本書目（3）』巻12下（p1025-1027）に見えるが、相異が見られる。今、補正されている後者に拠る。

卷	行	字	版心	宋諱	大小字數	刊刻時期	版
45	12	21	細黒口	敦		宋刊〔淳祐九年刊〕	A
				慎	間記	元刊	B
43	13	23				元明間刊	C
						明初翻元明間刊	D
	9	18	大黒口			正統十三年善敬堂刊	E

恒、恒、匡、敦缺筆」とし、B版を「避宋諱至慎字止」とするが、『藏園訂補』にはA版・B版ともに避諱の言及はなく、「行款版式全同，當是一本」という。つまりA版とB版は同一と考えられている。さらに、C版の避諱について『經眼録』に言及はないが、『藏園訂補』に「宋諱避至慎字」とする。

この中で13行本を洪武二一年刊とする説はE「明初翻元明間刊本」に当たるが、傅氏も「正統戊辰」の木記をもつ13行本を経眼していなかったのではなかろうか。傅増湘『雙鑑樓善本書目』（民国十八年）でも『柳集』の木記「戊辰」との関係については全く触れていない<sup>140</sup>。また、『藏園群書經眼録』では『韓集』と『柳集』の「合刊」本・「合集」本を言うが、後出の『藏園訂補邵亭知見傳本書目』ではそのことに全く言及がなく、「明洪武二十一年戊辰書林王宗玉刊本」についても、『韓集』13行本の条では「又有書林王宗玉本，亦明翻本，即四部叢刊所印者也」<sup>141</sup>というのみで、「戊辰」に触れず、つまり刊刻年を示さず、何とも釈然としない。

では、C版「元刊本」43巻12行本についてはどうか。『韓集』との関係には言及していないが、先に挙げた「朱文公校昌黎先生集」の条では「此元刊十二行本，亦與『柳先生集』合刊者，昔年曾見一『柳集』於海上，後為袁寒雲收之，版式正同」といい、また『藏園訂補邵亭知見傳本書目』でも「元刊本，十二行二十一字，細黒口，左右雙闌，版心雙魚尾，間記大小字數，宋諱避至慎字。前有陸之淵音義序。潘宗周藏，題為宋刊本」<sup>142</sup>とあって宋刊とする従来の

140 『中國著名藏書家書目彙刊－近代卷（28）』所収（p177）も同じ。ただしここでは「元刊本」とする。

141 『藏園訂補邵亭知見傳本書目（3）』p1020。

142 『藏園訂補邵亭知見傳本書目（3）』p1027。また『藏園羣書題記』（上海古籍出版社1989年）巻12（p613）に「余生平所見『柳集』宋刊本為海源閣之添注重校音辯大字本，九行十七字，虞山瞿氏之新五百家注本，十行十八字，李椒微師之増廣註釋小字本，十二行二十一字，潘氏寶禮堂之世綵堂本，九行十七字」。李盛鐸、字は椒微、号は木齋。

説、袁克文に始まる張元濟・潘宗周の説を否定する。さらに、李希聖『雁影齋題跋』でも宋刊と見做なすのに対して、傅增湘は「雁影齋題跋序」を寄せて「顧余詳覽全編，……韓、柳二集皆元刻也，而誤以為宋本」<sup>143</sup> といつて忌憚がない。傅增湘は張元濟とも親交があったが<sup>144</sup>、独り宋刊説に対しては元刊説を持って譲らないのである。

このような態度をみれば傅氏は確信をもっていたと思われるが、その根拠については必ずしも明確には示されていない。A版「宋刊本」では「宋諱貞……敦缺筆」を挙げるからこれを重要な根拠としているのであるが、C版について「宋諱避至慎字」というのは張元濟が潘宗周蔵43巻12行本について鑑定した所「宋諱：玄……慎等字闕筆」と合致しており、傅增湘はこれに拠ったとさへ思われる。少なくとも張氏の根拠を承知している。であるにも拘らず、なぜ元刊と断定したのか。かりにA・B両版の缺筆が「敦」字まで、C版が「慎」字までならば、C版は宋刊であるのみならば、A版よりも早いということになる。ただし実際にはA版は前稿で明らかにしたように「敦」の後、「廓」字まで缺筆されており、「至慎字」そのものが疑わしい。そのほか他版と異なる特徴として挙げられているのは「間記大小字數」であり、「間記」ならばその部分の数葉のみ補刻された可能性があるが、それを以て元刊と考えたのであるならば、他の部分は宋刊の版本を使った、つまりA版と同版であることを確認していなければならない。果たしてそうなのか、現存本を実検する必要がある。

### Ⅲ 43巻12行本の所在と“元刊”説

では、43巻12行本は何処に、何部が現存し、今日ではどのように鑑定されているのか。

一九八〇年から中国文化部の指導の下に全国の図書館・研究所等を動員して調査・整理された『中國古籍善本書目』<sup>145</sup>は、現存する音辯本の刊刻時期を、七つの表記を用いて分けており、またその後に出た『稿本中國古籍善本書目書

143 『藏園羣書題記』「附録二」p1085。

144 『張元濟傅增湘論書尺牘』（商務印書館1983年）。

145 『中國古籍善本書目』（上海古籍出版社1996年）巻23（45b、p128）。「前言」（p2）に「同時分函有關專家學者徵求意見」し、1983年に定稿、1986年に上海古籍出版社より線装本で出版、89年に洋装本として影印出版。

名索引』<sup>146</sup>・『中國古籍善本總目』<sup>147</sup>は、『中國古籍善本書目』と共通の資料を使用していて剽窃であるとも囁かれているが、さらに版式等を示して特徴を知るのに好い。ただし不備な点も多く、注意が必要である。例えば「明正統十三年善敬堂刻本」の項を遺漏、また『總目』# 970の版式の依拠資料と思われる『北京圖書館古籍善本書目』に見える「小字雙行同」も缺落している。この他、国家指定の重要文化財リストとして「國家珍貴古籍名録」も同様の分類をしており、『國家珍貴古籍名録圖録』<sup>148</sup>にはその全ての書影がカラーで収められている。これらは今日の権威ある定説と認められる。ただし両者の所蔵地・部数等は必ずしも一致しない。今、この三書による音辯本45巻本・43巻本の対照表を示す<sup>149</sup>。

時期	音辯本所蔵先\典拠	『書目』	『總目』	『珍貴古籍名録』
宋刻本	北京大学圖書館	#1491	#958	第三批 #07210
元刻本	北京圖書館 ----- 吉林市圖書館	#1492	#969	第四批 #00128
	北京圖書館 ----- 上海圖書館	#1493	#970	
	天一閣博物館 [天一閣文物保管所]	#1494	#971	
	[紹興圖書館]			第一批 #01052
明初刻本	北京圖書館 ----- 上海博物館	#1495	#972	
	山西師範學院圖書館 ----- 南京圖書館	#1496	#973	
	北京圖書館 ----- 中國歷史博物館			
	中共北京市委圖書館 ----- 上海圖書館			第三批 #08781
	河北大學圖書館			第三批 #08782

146 天津図書館編『稿本中國古籍善本書目書名索引(下)』(齊魯書社2003年、p1205-6)。

147 翁連溪編校『中國古籍善本總目(4)』(線裝書局2005年、p1205-6)。

148 中国国家図書館・中国国家古籍保護中心編『第一批國家珍貴古籍名録圖録』(国家図書館出版社2008年)、『第二批』(2010年)、『第三批』(2012年)。『第四批』は未刊(2014年2月出版予定)。

149 「名録」中の「國家圖書館」は混同をさけるために『善本書目』に従って旧名「北京圖書館」に改めた。

	山西省圖書館			
	遼寧省圖書館			
	吉林大學圖書館			第三批 #08784
	中共陝西省委黨校			
	南京圖書館	#1497	#974	
	浙江圖書館			
	紹興魯迅圖書館			
	安徽省圖書館			
	河南省圖書館			第三批 #08785
	廣東省博物館			
	四川省圖書館			
	重慶市圖書館			
	成都杜甫草堂			
	[甘肅省圖書館]	?		
	北京圖書館	#1498	#975	
	北京圖書館	#1499	#976	
	北京大學圖書館	#1450	#977	
	北京圖書館	#1451	#978	
	南京圖書館	#1452	#979	
	上海圖書館	#1453	#980	
	[柳州市博物館]			第三批 #08783
明正統十三年善敬堂刻本	甘肅省圖書館	#1504	?	第一批 #02042
	[浙江圖書館]			第一批 #02043
	[安徽省圖書館]			第一批 #02044
	[湖南圖書館]			第一批 #02045
明正統十三年善敬堂刻遞修本(9行本)	首都圖書館			第二批 #05388
	中國社會科學院			
	北京市文物局			
	上海圖書館			
	復旦大學圖書館			第四批 #00737
	華東師範大學圖書館			第二批 #05390
	天津[市人民]圖書館			
	山西師範學院圖書館			
	吉林省圖書館			第三批 #08786
	南京大學圖書館	#1505	#981	
浙江圖書館				
福建師範大學圖書館			第三批 #0878	

	廈門大學圖書館			第三批 #08787
	湖北省圖書館			
	湖南省圖書館			
	廣西壯族自治區圖書館			
	重慶〔市〕圖書館			第二批 #05389
	北京圖書館	#1506	#982	
	南京圖書館	#1507	#983	
	南京圖書館	#1508	#984	
〔山西省圖書館〕			第二批 #05391	
明正徳十年刻本	北京圖書館	#1509	#985	
	公安部群眾出版社			
	上海圖書館			
	遼寧省圖書館			
	中山大學圖書館			第二批 #05396
	重慶市圖書館			
	西南師範學院圖書館			
	西南大學圖書館			第二批 #05395
	北京師範大學圖書館	#1510	#986	第四批 #00738
上海圖書館	#1511	#987		
〔山東大學圖書館〕			第二批 #05397	
明刻本	上海圖書館	#1512	#988	
	蘇州〔市〕圖書館			第三批 #08789
	安徽省博物館			
	湖南省圖書館			
	〔山東省圖書館〕	?		
	〔山西省圖書館〕			第二批 #05398
〔四川省圖書館〕			第二批 #05399	
〔 〕=『書目』に見えないもの。〔 〕=『書目』・『總目』に見えないもの。# = 第一批から第三批は『圖録』での通し番号。第四批は『名録』中の番号。				

『書目』と『總目』の記載はほぼ対応しており、ただ「甘肅省圖書館」蔵本が『書目』の「明正統十三年善敬堂刻本」から『總目』の「明初刻本」に移っているが、「名録」は『書目』と同じ。逆に「安徽省圖書館」「湖南圖書館」各蔵本は『書目』と『總目』の「明刻本」から「明正統十三年善敬堂刻本」として「名録」に入れられ、これに「浙江圖書館」蔵本が新たに加わえられている。それは「半葉

十三行]「有“正統戊辰善敬堂刊”牌記」<sup>150</sup>というが、実際には<sup>151</sup>、牌記はなく、「刊刻時挖除」と理解されたことに因ららしい。前述のように、たしかにそのような牌記と枠の削除本、さらに牌記を削除して枠を残した埋木本も存在する。ならば、正統十三年より後の通修本(9行本ではない)であって別に扱うべきである。また、湖南図書館蔵本は「萬曆三年補刻本」とするが、9行本の中には版心に「萬曆三年補」として追刻したものあり<sup>152</sup>、これとの混同はないか。湖南図書館蔵本が13行本であることに間違いのないとしても、さらに万曆三年補刻本として分類されるべきであろう。さらにいえば、「諸賢姓氏」の末葉に牌記がなく、代わって「姓氏畢」が刻された別版もあるのだが、『書目』の段階では、これと牌記削除本や埋木本が区別されず、共に「明初刻本」として扱われている。「國家珍貴古籍名録」における審定の疑問はこれらの例に止まらない。

この中で「宋刻本」は先に掲げた北京大学蔵李木齋45巻本のみであり、それに続く「元刻本」は6部、やや多くなっているが、「國家珍貴古籍名録」には現在の所、なぜか2部しか登録されていない。その中にはかつて宋刊とされていたものがあり、また13行本も含まれている。今、「元刻本」の特徴を『中國古籍善本總目』・『北京圖書館古籍善本書目』によって対照させれば次の表のようになる。

先に触れた『柳宗元著作版本圖考』が『書目』に拠るとして版式による元刻本三種説をしめしているが<sup>153</sup>、単にこの『總目』からの転載に過ぎない。

この中で12行本では『書目』#1492=『總目』#969中の北京図書館蔵本#8711のみが「名録」第四批#128に指定されている。これは先に見て来た、袁克文・潘宗周・張元濟が宋刻とし、傅增湘が元刻として対立した一本であるが、傅氏説が支持されたわけである。ただし先に指摘したようにその根拠は必ずしも明確ではなかった。また、前稿でも述べたように<sup>154</sup>、劉薔『天祿琳琅研究』は「天

150 『第一批國家珍貴古籍名録圖録』(p195)。書影は卷1葉1aのみで牌記部分(「諸賢姓氏」1b)はない。

151 『柳宗元著作版本圖考』の「《唐柳先生集》兩方牌記釋疑」(p79)によれば、浙江図書館に打診して有無を直接確認している。

152 台湾・中央図書館蔵#09754。また『韓集』の9行本にも万曆三年補刻本(中央図書館蔵#09705)がある。

153 「之一版式為十二行二十一字，小字雙行同，細黑口，四周雙邊，行格同於宋本，藏國家圖書館和吉林省館。之二版式為十二行二十一字，黑口，左右雙邊，藏國圖及和上海圖書館。之三為十三行二十三字，小字雙行同，細黑口，四周雙邊，存天一閣文物保管所」(p56)。

154 「清内府蔵本『增廣註釋音辯唐柳先生集』考」(『島大言語文化』35、2013年)。

「元刻本」 典拠	A		B		C	
	四十三卷, 別集二卷 外集二卷, 年譜一卷 附録一卷		四十三卷 外集二卷 附録一卷		四十三卷 外集二卷 附録一卷	
中國古籍善本書目	# 1492	吉林省圖書館	# 1493	上海圖書館	# 1494	天一閣博物館
中國古籍善本總目	# 969 12行 21字 小字雙行同 細黑口 四周雙邊		# 970 12行 21字 黑口 左右雙邊		# 971 13行 23字 小字雙行同 細黑口 四周雙邊	
北京圖書館古籍善本書目	# 8711 12行 21字 小字雙行同 細黑口 四周雙邊	北京圖書館	# 4977 12行 21字 小字雙行同 黑口 左右雙邊	北京圖書館	/	
國家珍貴古籍名録	第四批 # 128 袁克文跋					

祿琳琅書目後編」卷 11「元版集部」の音辯本の本(前稿【E】)を北京図書館(巻 1-15、21-23、33-35、別集上、下)、吉林図書館(巻 18-20)に分散して所蔵するとするが<sup>155</sup>、極めて疑わしい。この二箇所に残存する元刻音辯本は『書目』# 1492=『總目』# 969 しかなく、さらにその内の北京図書館蔵本を『北京圖書館古籍善本書目』と照合すれば# 8711=「名録」第四批# 128 ということになるが、両者は存巻が全く異なり、また【E】ならば印記「宮九/氏」白文、巻首。「高印/登雲」朱文、巻首」を有するはずだが、マイクロフィルムで見ると、北京図書館蔵本にそのようなものも見当たらない。

次の『書目』# 1493=『總目』# 970 は更に「目錄卷三至四、三十二至三十八配明初刻本」と記載されているのが『北京圖書館古籍善本書目』# 4977 と一致するから、凌志斌寄贈本、前稿で考証した『天祿琳琅書目後編』が「宋版」とする【B】である。たしかにこの版式は先に掲げた上海図書館蔵「宋刻本。半葉十二行、行二十一字」本にも合致するが、残本は「存四巻」、巻首や別集等を欠く巻 10~13 であり、凌本と同版であるとする根拠は不明。

『書目』# 1494 は「四十三巻、外集二巻、附録一卷」としながら、更に

155 『天祿琳琅研究』(北京大学出版社 2012 年、p 149)。



「元刻本〔卷二至六、九至十二配明初刻本〕。存二十六卷：二至六、九至十二、二十四至三十、三十四至四十三」であるというが、「外集二卷、附録一卷」が本来備わっていたと解釈されたとしても「別集二卷」あるいは更に「年譜一卷」を欠いていることによる分類であるならば『書目』#1493と同版とすべきであるが、『書目』には行款が記載されていないために誤解するのであって、じつは『總目』#971によって全く異なる版式、13行本であることがわかる。これと酷似する版式が「名録」の第1批 #01052であるが、所蔵先が異なる。『書目』#1494=『總目』#971は天一閣博物館・天一閣文物保管所とする。『天一閣書目』（嘉慶十三年1808）<sup>156</sup>に『柳文』四十五卷内外集二卷：刊本。○唐劉禹錫編次并序。『柳文』四十三卷：刊本。○唐柳宗元撰、劉禹錫編、童宗説音註」とあるが、民国三年（1914）に盗難に遭っており、繆荃孫『天一閣失竊書目』<sup>157</sup>に「増廣注釋音辨柳先生集四十三卷 缺。宋童宗説注、張敦頤音義。存卷一至三十七」というから、複数部所蔵されていたのであろうか<sup>158</sup>。現時点では「名録」に天一閣博物館蔵本は見えず、寧波に近い「紹興圖書館蔵」ということから、同一本ではないかとも懷疑されるが、『書目』・『總目』には「存二十六卷」とあり、「名録」に「存四十四卷」という所に合わない。あるいは紹興圖書館蔵本が天一閣博物館蔵本と同じ版式であったことによって当地の館員が元刻本と認定した可能性も否めない。しかし少なくとも他の「元刻本」はいずれも12行本であるのに対してこの2部は13行本であるから、明らかに異なる。この13行本を「元刻本」とするならば、12行本の方を宋刻本と考えることもできよう。今、天一閣蔵本は未詳であるが、紹興圖書館蔵本は書影巻1葉1aのみで見ると、『第一批』#02042-45と字様や罫線の寸断箇所まで一致するから同版、つまり明刊ではなかろうか。

今日、『天祿琳琅書目後編』が「宋刻」とする凌志斌寄贈43巻12行本、張元濟等が「宋刻」として対立した袁克文旧蔵43巻12行本、上海圖書館蔵「宋刻」43巻12行本はいずれも元刻に訂正されている。これによれば傅增湘の説に従って45巻12行本を宋刻、43巻12行本を元刻、43巻13行本を明刻と鑑定した、

156 范邦甸『天一閣書目』（中国歴代書目題跋叢書第3輯、2010年）巻4之2（p427）。

157 『清代私家藏書目錄題跋叢刊』（国家図書館出版社2010年）第12冊所収（民国鈔本）p603。

158 『天一閣国家珍貴古籍名録圖録』（天一閣博物館編、北京出版社2010年）には採録されていない。

つまり版式の相違を王朝の変化に対応させたかのようなのである。

### おわりに

音辯本 43 卷 12 行本に関する清代以後の著録は少なくない。しかし同一本の収蔵者の交替による祖述や経眼借鑑による記録もあって交錯しているが、清代における伝存部数そのものがすでに多くなく、今日に現存するものはさらに少ない。43 卷 12 行本は、固より 45 卷 12 行本の稀少価値には及ばないが、43 卷 13 行本が通行本となっている今日、極めて貴重な版本であるといえる。

その成立年代については諸説に分かれる。清代から民国初にかけて、43 卷 12 行本の存在はほとんど知られておらず、43 卷 13 行本を宋刊とする説が圧倒的に多かった。それには『四庫提要』の影響が少なくない。しかし清代中葉以後、明末・毛友仁の跋文の発見によって「延祐間刻」つまり元刊本とする者も現れるようになる。いっぽう民国期に入って 43 卷 12 行本の存在が知られるようになると、李木斎蔵「淳祐九年序」45 卷の 12 行本をも知る袁克文の収蔵によって宋刊とされる。張元済はその説を継承し、宋諱缺筆から「光宗朝」説を展開するが、袁氏蔵本を経眼した傅増湘は元刊と鑑定する。かくして民国期の書志学を代表する両泰斗の説は対立することになるが、今日では傅氏説を受けて 45 卷 12 行本を宋刊、43 卷 12 行本を元刊、43 卷 13 行本を明刊とするのが定説となっており、しかも袁氏旧蔵本は「國家珍貴古籍名録」に「元刻本」として登録された。しかし 43 卷 12 行本は袁克文旧蔵本以外にも数部ある。また、その一方で紹興図書館・天一閣等蔵の 45 卷 13 行本も元刻と認定され、しかも紹興図書館蔵本は早くに「國家珍貴古籍名録」入りしている。そもそも傅氏説は 43 卷 12 行本を元刊とする一方、45 卷 13 行本については「元明間刊」として曖昧で、ともに確証は明示しされていなかった。今日、国家の指定する古籍の等級では「元明間」にボーダーがあり、元本は一級、明本は二級とされているから、「元」・「明」の差は重大である。

また、今日の主要な通行本である四部叢刊本も 43 卷 13 行本であり、これは張氏の 43 卷 12 行本宋刊説の根拠の一つとなっていたのであるが、今日でも『柳集』版本研究家の間でこの説が採られている。しかし合刻の『韓集』の刊記「歲舍戊辰十月吉旦、書林王宗玉謹識戊辰」や『柳集』の木記「正統戊辰善敬堂刊」の一致、さらに明代に建陽書坊王氏善敬堂が活躍している点から、明・正統十三年（1448）合刊本である可能性が高い。

このように音辯本 43 卷 12 行本は極めて貴重であり、しかも重文リストである「國家珍貴古籍名録」に多くが漏れているが、本稿と前稿によって故宮博物院・北京図書館・上海図書館に現存することが確認できた。果たして 43 卷 12 行本は元刊なのか、あるいは宋刊なのか、はたまた明覆元刊なのか。かりに宋刊であれば 45 卷本との関係はどうか、また元刊であるとしても 45 卷本からただ「非國語」2 卷を除いて『別集』扱いしただけの覆刻なのか。それぞれいかなる特徴をもっているのか。次稿では現存本によってこれらの問題に迫りたい。

(2014.1.10)

\* 本稿は平成 25 年 (2013) 科学研究費補助金 (課題番号 23520433) による研究成果の一部である。